
空の蝶

ネコまた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の蝶

【Nコード】

N0169F

【作者名】

ネコまた

【あらすじ】

極道の家の一人息子と最強の女の子が出会って始まる物語。なんと漫画的展開で出会った二人が奏でる学園ラブ。伝説の族「紫蝶」の族長は蝶のように美しいという。そして、紫蝶と同じ色の名を持つ者が最近できた族「虹」にいる。 ランキングの方もよろしく願います。

ひとつめ 事実は小説よりも奇なり（前書き）

コメディに挑戦！

ひとつめ 事実は小説よりも奇なり

どうしてこんな事になったんだろう。何なんだこの漫画的展開。

俺がこんなに困惑しているというのに目の前で呑気にお茶なんかすすってる男が憎くて仕方ない。

一ヶ月前に四十歳になったばかりのどう見ても三十代半ばに見えるこの男は、実は俺の父親だったりする。

この時代に家では常に和服を着て、いい年こいて色気すらある親父の正体は、裏の世界ではかなり有名な泣く子も黙る『滝川組』の組長、たきがわまさかず滝川雅和である。

まあ、簡単に言えば極道者……ごせんにも出てきてたその筋の人だ。そして俺はこの男の一人息子。別に俺は、やたらとジャージを着てるとか教師をしてるとか、そういう訳じゃない。むしろ俺は教わる方だ。

…話が逸れてしまったか。

俺がこんなに困惑しているのには理由がある。そりゃそうだろう、等というつつこみはこの際無視だ。ひかのぼ時間にすれば、わずか十分前に遡る。

そもそも、俺が古本屋から帰ってきた時から嫌な予感はしていたんだ。

恥ずかしげもなく表札に滝川組と書かれた、庭に池まである馬鹿でかい和風の昔ながらの家。いかにもって感じて近所ではすっかり有名だ。

ここまでは何時もと変わらないな。何故か塀へいの一部が壊れていたが…。

しかし、それが俺の嫌な予感の原因になった訳じゃない。精々、首を傾げたくらいだ。

問題は組員達だった。

若い奴ら（とはいえ俺より年上だ）に怪我をしている者が多いのだ。大怪我ではなく絆創膏ばんそうこうや湿布程度のもののだが、やたらと目立つ。

嫌な予感もするというものだろう。

しかも俺と目が合うと決まってそらすか、苦笑いをするかのどちらかだ。尋ねても曖昧に笑って逃げられてしまう。

腑ふに落ちない気持ちでいたら親父からの呼び出し。

そう、これが俺の困惑の引き金になるのだ。

呼び出された部屋は今が客室だが、元々は爺さんと婆さんが使っていた。陽当たりが良く庭の眺めも最高な場所。幼い頃、婆さんのお気に入りの花瓶を割ってしまい婆さんに縁側から外にぶん投げられた。まあ、そんな思い出深い場所だ。

二人は老後を楽しみたいとかで四年前から何処かの田舎で暮らしている。年賀状は毎年来るので、まだ生きてはいるんだろう。自称新婚生活だそうだ。

爺さん達が旅立つ日、それを聴いてうつかり笑ってしまった俺は今度は爺さんに縁側から外にぶん投げられた。

結果、池に落ちた。

そんな感じで俺にとって特別なあの部屋は、立地条件的にも特別だったようで大切な客以外は滅多に入れない。

そんな上等な部屋に呼ばれるということは誰か特別な客でも居るのだろうか。

「親父、入るぞ」

一言断って入るとやはり客が居た。

しかし、想像に反してそれは俺と同じ年くらいの女の子だった。

胸までのクリーム色の髪はストレート。陽の光が当たってるせいか全体的に淡く感じた。

親父と向かい合って座っている。

俺がぼうつと立っていると親父が俺に女の子の隣に座るよう諭す。

「ようやく帰ってきたと思ったたら何を惚ほけているんだ。いくら蝶子嬢が美人だからといって、失礼だろう。

すまないな、蝶子嬢。これがうちの馬鹿息子、空遥たかはるだ。

空遥、こちらは柳原蝶子しゅうげんていしさんだ。

これからこのお嬢さんも此処で住むことになったから仲良くな。

よし、話はこれくらいだな。蝶子嬢、部屋はそこでぼうつと座ってる空遥に案内してもらいなさい。

空遥、お前の部屋の隣空いてるだろ。そこが今日から蝶子嬢の部屋だ」

ここで最初に戻る訳だ。

言っておくが、俺は親父が言ったようにぼうつとしてた訳じゃない。逆に今までにないほど頭は情報処理で急速に働いている。そのせいで動きが鈍くなっているのだ。

あれ、それがぼうつとしてるといふことなのか。……いやいや、そう見えるだけだっただけだ。

あれ、そう見えちゃダメなんじゃ………もう、いいや。

とにかく、親父はこの隣にいる子をここに住まわすつもりらしい。いつまでかは知らないが、それはすでに親父の中では決定事項で、それは同時にこの組の決定事項にもなる。例え俺がどんなに反対しようともだ。

この組では親父が絶対なんだ。でも、それでも、黙ってられない。俺は勢いよく立ち上がった。

「親父っ、本当にこの子をうちに泊める気が」
ビシッと彼女を指差す。

「ああそうだ。

細かい事を言っつと泊めるっつて言っつより住ますんだがな」

こ、こいつ微笑みながら言い切りやがった。

いつものことながら親父の俺様っぷりにはため息がでる。でもここで退くわけにはいかない。

「で、でも此処にはほとんど男しかいないんだぞ。女といえば母さんしかいないじゃないかっ。その母さんだっつて最近ほとんど家にいないし。

そんな中に女の子を一人で放り込むなんて……いくら此処の奴らが分別あるからっつてだめだっ。

それに俺の部屋の隣っつていっつても薄い壁で隔たっつてるだけじゃないか」

俺がそういっつと親父はわざとらしくため息をついた。

「なんだよ。」

俺は別に間違ったこと言っていないぞ」

常識から見て俺は間違ったことは言っていないはずだ。

「まあ確かに高一のまだ思春期から出てない糞ガキには少し酷かもしれんな。だが心配ないだろ。」

蝶子嬢、嫌な事をされたら例外なく手加減しなくていい。問題はない。

これも要らぬ心配になるだろうがな。

なにしろうちの馬鹿息子はともかくアレを見た他の奴らは手を出したくても出せんだろうし、それに俺からよく言っというた。

俺に逆らおうとはしないだろう。

でももし何かされたらすぐ俺に言いなさい。すぐそいつを絞め上げるから」

にっこり笑って言っちゃったよこの人。

それにしても親父はやけにこの子を気に入ってる。女に『嬢』なんてつけて呼んでるなんて普段の親父からは考えられない。

息子に対しては放任主義だし、老若男女関係なく誰に対してもクルで我関せずな何を考えてるかわかんない奴だったのに。

母さんは例外だけど。

実は親父が唯一頭が上がらないのが母さんだったりする。二人は高校の同級生だったらしい。

その頃の二人を知っている爺さんの右腕だった一番の古株、田中さんが言うには昔からそうだったようだ。

親父を止められるのは実際母さんしかいない。

実は俺の母さん、滝川綾美たきがわあやみはある有名な企業の娘で、いわゆる金持ちのお嬢様だ。うちに嫁に来たが、時々助っ人として会社に呼ばれる。今居ないのはその為だ。有名な企業が極道者と繋がっているなど問題だと思うのだが、うちが怖いのか母さんの実家が怖いのか、誰も手を出さない。母さんも決して会社の表舞台には出ない。

「なあ。二人は一体どんな関係なんだ」

いつもの親父からは考えられない彼女に対する態度に思わず眉をひそめながら聞いてしまった。

すると親父は一瞬ポカンとしたがすぐに納得したように話し出した。

「お前がまだチビだった時一度うちで会ったと思うぞ。

まあ覚えてないのも仕方ないがな。

ちなみに俺は今回で三回目だ」

やたら勝ち誇った様子に腹が立つ。本当に何なんだ今日のこいつは。

「蝶子嬢の両親、征久ゆきひさと翔子しょうこさんは俺と綾美の親友だ。その親友二人が仕事で長期間海外に行く事になった。

一人暮らしながら危ないからな。二人に相談されたんだ。

それで、そういうことならうちに来てくれれば良いってことになった」

いつの間にか彼女を凝視してしまってたらしい。目があつた。

余程俺が困惑してる顔をしていたのだろう。

「私としても助かりました。お父さんが旅費の足しにする為に家を売ってしまいましたから。」

滝川さん夫婦の事は両親からよく聴かされてました」

さりげなく親父をフォローした。親父もなんか嬉しそうだし。何か腹立つ。

ていうか旅費の足しって……。

まあ、そんな事は置いといて、初めて声を聴いたが、淡々（たんだん）としているな。すごく冷静だ。

その雰囲気と整った容姿や珍しい色の髪が合わさり儂くも大人っぽい印象を受ける。クラス的女子とは大違いだな。

「そう言ってもらえると嬉しいよ。此处を自分の家だと思ってくれて構わないから。」

組員の奴らや空遥もこき使っていていい。それから俺の事は雅和さんとか雅和おじさんと呼んでくれ。

滝川さんなんて他人行儀すぎる。

それじゃ空遥、部屋に案内しろ。

そうそう、蝶子嬢の荷物はもう部屋にあるから」

他人だろ、と心の中でツッコミながらため息まじりで空遥は立ち上がる。それに続き蝶子も立ち上がり、二人で廊下に出た。

一人残された雅和は、日の光でキラキラと光る庭を見つめながら物思いに耽っていた。

「初め成長した蝶子嬢を見た時は驚いたよ。」

あの髪の毛のせいもあるのだろうが翔子さんと瓜二つだ。

性格はまるで違うが……。あのとても意志の強そうな眼は征久似だな。

……あの頃の事を今も覚えてる。

あの子達は俺達の夢の形だ」

正直言つて俺は女の子が苦手だ。

決して女嫌いな訳ではない。

だが、幼い時から男ばかりの環境だったためどうやって女の子に接したらいいか分からないんだ。だから今この状況で二人とも黙って歩いているのも仕方のない事だと思う。

が、気まずい。すごく気まずい。やはりここは俺から話し掛けるべきなのか。

「えっと、その髪は染めてるのか」

何言つてんだ俺っ。もっと気の効いた事あるだろ。

………ダメだ、何も思いつかない。

「これは元々。クォーターだから」

急に話し掛けたが驚くそぶりもなく答えてきた。

それが余りにも普通に言われたものだから一瞬聴き流してしまいそうになった。

「ふ〜ん。………えっ、クォーへ、つつ」

………啞んだ。

彼女は前を見たままこくん、と頷く。

知らなかった。まあ、彼女とはさっき会ったばかりで事情を大まかに説明されただけなのだから当たり前か。

「瞳は黒いのに」

ぼつりと口から滑り落ちた言葉は誰にも聴かれなかった。

廊下を歩いてると目の前によく見知った姿が見えた。その内の一人は帰ってきた時見た他の奴ら同様怪我している。

「辰たつに秀ひで、お前までどうしたんだその傷」

「ああ、おかえり空遥。これはその……」
二人は気まずそうに苦笑いしている。

「どっかの組の奴らにやられたのか。そういえば塀も壊れてたな」

「いえ、実はこれはそちらのお嬢さんにやられたものなんです」
黒髪でスーツを嫌味なほど着こなしたスラッとした長身の男、秀が話した。その横では派手な柄シャツを着た短い金髪の男、辰が苦笑いしている。

一瞬何を言われたか分からなかった。問うように隣に視線を向ければ目が合い、頷かれる。

それを見て更に混乱し絶句してしまった。

辰は決して弱くない。他の連中だってそうだ。女だからと油断してたとしても、普通の女が何人も怪我させるなんて出来るのだろうか。

「ごめんなさい。この家特有の挨拶かと思ったので。勢い余って塀まで壊してしまいました。直しときますね」

普通じゃないようだ。
挨拶って……。

「いいつスよ。オレ達も悪かったんだから。」

お嬢は気にしないで」

にこやかに笑いながら辰が言う。

悪人面だが、根は素直でイイ奴だ。

ん…ちよつと待てよ。

「そうです。お嬢さんは何も気になさらないで下さい。組長の大切なお客ですし塀は私達が直しときますから」

だからちよつと待て。

「お前ら、そのお嬢さんて何だ」

「お嬢はお嬢ですよ」

辰が怪訝そうな顔で言う。

だから誰の事かって訊いてんだよ。いや、分かってるよ。一人しかいないって事は。

「蝶子さんの事です」

秀が爽やかに笑いながら言うのけた。

はあー、やっぱりか。

心の中のため息を吐く。

ふたつめ 人生、諦めが肝心

「坊ちゃん、夕飯の支度ができましたよ」

襖越しに噎れた声しわがが聞こえた。

「田中さん、坊ちゃんって呼ぶのは止めてくれって言ってるだろ」

田中さんは爺さんの右腕だったが、爺さんが田舎に行ってから親父の相談役だ。面倒見が良く、組員達にも慕われている。怒ったら怖いが…。

前に田中さんの趣味の盆栽を誤って割ってしまったことがあった。次に目覚めた時、俺は何故かびしょぬれで池の中に居た。

「すみません、つい。」

それはそうと今日は綾美お嬢さんが早く帰ってきたようですよ」

今、軽く流されたよな。まあ、いいか。

母さんが帰ってきてるって事は久しぶりに母さんの料理か。組員達を作るのも不味くはないんだけど何か味気ないからな。

「そつえば、あの女の子呼んだ方がいいよな」
忘れてたよ。

「蝶子お嬢さんなら、もうあちらに居ますよ」

いつの間にか居間に来ていた。

田中さんの指す方を見ると台所。母さんの隣にはあのクリーム色。

やっぱり目立つよなー等と考えると母さんが振り返って目があつた。

「あらあら、空遥やつと来たの。蝶子ちゃんに見蕩れてないでお皿持って行ってちょうだい」

親父と同じ様に和服を着込み、髪は後ろで団子にしている。母さんも、もうすぐ四十歳になるはずだが随分若く見える。

ていつかさっきの台詞、どっかで聞いたことあんど。

「なんだ、空遥。また蝶子嬢に見蕩れてたのか。いくら美人だからって、ダメだぞ」

お前だー！。

いつの間に居たんだ親父。気配しなかったぞ。

「お前が蝶子嬢に見蕩れてたからだろう」

「心の中読まれたっ」

「アホか。全部声に出てる」

心底呆れた顔をされた。

ちらつと台所の方に眼を向けると女の子と目があった。

恥ずっ。何か恥ずかしいぞ。

「こら、馬鹿親子。さっさと皿持って行きなさい。あんた達だけよ手伝わないの」

母さんの声に俺と親父は慌てて皿を運んだ。

「うちは組員達と一緒に食べる。とはいえ人数が多いので、襖を開け部屋を繋げて、大きなテーブル二つを組員が使い、もう一つのテーブルを家族で使う。ちよつとした宴会だ。」

そして今は何故か俺の隣に彼女が座っている。

「夢だったの。」

娘と一緒に台所に立つの」

「ぶあつふ、ゲホツゲフツ」

思わず咽^むせてしまった。

正面にいる親父が迷惑そうな顔をしているが無視だ。

「エプロンもね、今日の為に買っていたの。あれはもう蝶子ちゃんにあげるから使ってね」

「すごいニコニコ笑ってる。母さんってこんなキャラだったけ。もつとさばさばしてなかったっけ。」

「そつだ、空遥。貴方、明日から学校よね」

「そついや、そつだった。今日は夏休み最後の日だったな。色々有りすぎて忘れてた。」

「明日、蝶子ちゃんを理事長室に案内なさい。蝶子ちゃん、編入す

るから」

「ぶおっぶつづう」

お茶を飲んだのがいけなかった。思わず嘔き出してしまった。親父が嫌そうな顔をしているが無視だ。

「へっ、編入するのか。あの学校に」

俺が通っている学校は小学校から大学院までの一貫性の私立だ。この辺じゃ有名な金持ち学校。ここには中学と高校だけがあり、他は別の所に建てられている。

母さんは昔、小学校からそこに通っていて、親父は高校の時に入学したらしい。俺も高校から入れられた。

金も高いが偏差値も高い学校なのでほとんどが小学校から通ってる奴らで、途中入学は滅多にない。そのため俺もやたら注目されて鬱陶しかった。

正直、俺はぐれてる方なので一ヶ月もすれば何もなくなったが…。

「母さん、俺でも最初は大変だったのにこんな中途半端な時期じゃ可哀想だろ。悪目立ちするし」

「俺の時も大変だったなあ。まだ若かったから片っ端から殴ってたけど」

親父の得意気な顔が腹立つ。

「二学期からなんてある意味すつきりしてると思うけど。皆、夏休みで浮かれてきつと気付かないわよ」

いや、それは無いだろ。

「それにもう手続きしたし、蝶子ちゃんたら編入テストの点も良かったのよ。蝶子ちゃんの両親も昔あの学校に通ってたんだから大丈夫よ」

両親も通ってたってことは実はこの子金持ちなのか。いや、でも今までは違う所に通ってたんだよな。

「空遥、人には色々事情があるんだから余計な検索は止めなさい」
厳しい口調で母さんに言われ、頷くしかなかった。

はあ、何か今日一日で色々あったよな。しかしまあ、よく漫画である、朝転校生がきてそれがなんと居候してる女の子だったあのびっくりにならなくてよかった。いや、展開的にはそうなるが最初から知ってる分驚きがない。これをもし知らされないままだったら色々大変だった。俺の頭が。

「じゃあ、おやすみなさい」

女の子にこんな事を例え無表情だったとしても言われれば嬉しい。顔が勝手に微笑んでしまうのも仕方ない。

「ああ、おやすみ」

ピリリリ・・・
ピリリ・・・ピリ・・・

ガチャツ、ガツ

……朝か。

ん、何だ、さっきの音。

今、何時だ。

「……………何で目覚ましがあんな所にあるんだよ。壊れては…いないな」

おかしいな俺は寝相はいい方なのに。

「よいしょつと」

……あれ、何か左手が重い。

…

……

……

「な、何で」

何で此処に彼女がいるんだー！。

とりあえず、叫ばずには済んだ。右手でしっかり口を押さえたからだ。

ここで叫んだら組員が駆け付ける。それでは困る。変な誤解でもされたら大変だ。親父や母さんに殺される。とりあえず、ここは慎重に、まず心を落ち着かせよう。

ブチッ

え……。

「しまったーっ」

ドサドサドサ

「な、なんとか危機一髪」

文法がおかしいが今はそれ所じゃない。

目の前にはさつきまで寝ていた布団に鋭くとがった木の破片の数々が刺さっている。その足元には切れたワイヤー。ワイヤーが切れると落ちてくる仕組みになっていた。

母さんは気まぐれにこんな仕掛けを俺や親父に施す。俺を殺したいんだろうか。泣きたくなる。

「空遥、何か凄い声が聴こえたけど大丈夫へブツ」

ガシャーナー…

今の声は辰か。

外にもタライか何か仕掛けてあつたみたいだな。

「あれ、辰。何やってんだお前」

親父ーっ。

やばい。忘れてたが今、俺はパジャマ姿の彼女を抱えて座り込んでる状態だ。

何時もは起きたらさっさと居間に行くくせに何で今日に限ってこんな所に来てんだよ。

「おーい、空遥。蝶子嬢に声を掛けに来たんだが、綾美がお前に仕掛けた罠に何故か辰が掛ってんぞ。何とかして……………」

…………しーん。

「い、いや。違うから。朝に目覚ましどっかいてって辰がガシャーンって左手が」

滅茶苦茶だ。もう、何言っただ俺。

親父を見てみるが、襖を開けた状態のまま固まっている。

「ん、んー」

腕の中で聴こえた声に俺と親父は肩を震わす。

次の瞬間、視界が逆になったと思ったなら背中に痛みが走ってた。投げ飛ばされたんだと気付いた頃には親父は廊下で彼女に馬乗りにされてた。親父を殴ろうと手を振り上げている。

パチンッ

………

「あれ、私何して」

「おはよう、蝶子嬢。目が覚めたようだね」

親父がにこやかに挨拶する。

何が起こったのか俺には分からない。

唯一分かるのは親父が辰の上に乗っかってるせいで辰が死にかけてることだけだ。

ガクッ…

あ、死んだ。

「ごめんなさい。同じ様な襖だったので夜中にトイレ行った時、間違えて入ったみたいです」

「そうだったのか。それでは仕方ないな。

まあ、それはもういいから、支度してきなさい。今日から学校だからな。早くしないと遅刻するぞ。

空遥、お前も惚けていないで早く支度しろ」

彼女は急いで部屋に戻って行く。

「なあ、さっきの何だったんだ」

彼女が部屋に戻ったのを確認してから訊く。

「蝶子嬢の父親もそうだったんだが、寝惚けが酷いんだ」

どんな寝惚け方だ。

「さらに悪い事に蝶子嬢は翔子さんに似て朝に弱いらしい」

翔子って確かあの子の母親の名前だよな。

「眼を覚まさせるには一つしかない。

猫だましだ」

ね、猫だまし。そうか、それでさっきの音。

やけに居間が騒がしい。

「蝶子ちゃん、本当に良く似合ってるわ。空遥の制服姿は何ともないのに、やっぱり女の子の制服は違うわね。すごく可愛い」

母さんがべた褒めしてる。

確かに彼女の制服姿は可愛い。

深緑のスカートと肩が少し膨らんだ夏用の半袖の白いブラウスに一年の印である赤いネクタイが髪の色に合ってる。

俺は同色のネクタイで半袖のシャツに深緑のズボン。

本当に同じ学校の制服とは思えないほど彼女は似合ってた。

「どう、空遥。蝶子ちゃん似合ってるでしょ」

深く考えずに母さんの台詞に頷いてしまう程に。

「若旦那にお嬢さん、ご出勤ですかい」

塀の所に安さんやすがいた。作業着を着て塀を直してる。

安さんは親父より少し年上で若い奴らをまとめる兄貴分だ。田中さんとも仲良い。

「安さん、出勤って言い方は止めてくれ。悪いことしにいくみたいだ」

「ハハハ、すみません。昔からの癖みたいなもんです」

癖って……。

「おや、空遥にお嬢さん。今から学校ですか」

バイクを貸しますよ」

向こうから秀が来た。
なかなか出れない。

「秀、バイクは禁止なんだよ。免許もないし。何回も言ってるだろ」

「ちっ、学校というのは何とも堅苦しい」

こわっ。舌打ちかよ。

「そっいえば、辰を見ませんでしたか。朝からいないんですが」

「さあ、知らね」

ふたつめ 人生、諦めが肝心（後書き）

く空遥達が家を出て十五分後く

ムニッ

「あれ、辰。こんなとこに居たのか。廊下で寝たら踏まれるぞ」

「…秀、とりあえず足退けて」

みつつめ 山あり谷あり

女と男では歩幅が違うというのが初めて実感した。よくドラマなどであるが、本当だったんだな。

頭一つ分の身長差があるから当然と言えば当然。

できるだけゆっくり歩く。

誰が何を考えて建てたかは知らないが、やたら大きいうちの高校は長い坂の上にある。中学は坂の下。
通称『地獄坂』。…そのままだな。

噂では、この長い急な坂を急いでたのか下校時間に自転車で降り、止まらなくなつて何人かひいた後、偶然停まつたベンツに突っ込んでしまったアホがいるらしい。

さつきから横を何台もの車が通り過ぎる。

此所は金持ちの奴らがほとんどだから送り迎えをしてもらつてる奴らも多い。

うちは放任主義だし、我が子を崖から落として弱らせてから猛獣が居る檻に入れるような両親だ。送り迎えなんてありえない。

少し心配だったが彼女も頑張つて歩いてる。

珍しい髪の色の子か彼女に視線が集まつて鬱陶しいだろうにそんな素振りは一切見せない。気付かない筈はないだろうに。

全部が彼女に向けられたものという訳でもないが…。

彼女に合わせて学校指定の鞆が揺れる。ちなみに俺はスポーツバックを使つてる。帰宅部だが何かと便利だからだ。

「やっと、着いた。」

「疲れただろ」

彼女を見る。

「此所、本当に高校なの」

…スルーされた。

気持ちには分かる。俺も初めて来た時はびっくりしたものだ。なにしろ広い。中庭には噴水まで有る。

「中学から寮生活の奴もいるからな。此所にも寮があるんだよ。だから余計に広い。」

とりあえずは理事長の所だ。歩きながら色々説明する」

「教室の並びとかは多分理事長が地図くれるからそれで覚える。あれがこの学校名物の中庭。噴水もあるしテーブルもある。あそこで昼飯食う奴もいるな。奥には生徒会が管理しているバラ園があるが一般生徒は立ち入り禁止だ。生徒会の連中は時々あの中で飯食うらしい」

まあ、こんくらいかな他の学校と違うのは。

庭と飯の事しか話してないような気もするが。

「あ、言うの忘れてたが学年の色分けがある。これは前の学校でもあっただろ。
ネクタイの色が赤が一年、青が二年で緑が三年だ。俺達が進級してもネクタイはそのまま今度は一年が緑になる。それと生徒会の連中は左腕に赤茶色の帯を付けてる。
文化祭では風紀委員も橙色の帯を付けるな」

「話、変わるけど。
理事長つて綾美さんの従弟だよな」

母さんのこと名前で呼んでんだ。
つて、そこじゃなくて。

「確かに理事長の松永透まつながとおるは母さんの伯父おじさんの息子だが、何で知ってるんだ」

松永の家とうちの繋がりは表舞台には決して出ない。知っている者も少ないはず。

「お母さんがよく言ってたの。この学校で知り合って仲良かったって」

そういえば透さんは母さんの一つ年下で、此所に通っていた。彼女の両親とうちの両親は親友だと言ってたのだから知ってて当たり前かもしれない。
しかしよく考えたら凄いな。ほとんどの者が知らない事を彼女が知ってるなんて。

「着いたぞ。此処だ」

目の前にはやけに立派な扉。

この場所は四階の一番奥にある。金持ちの学校だけあってエレベーターがあるので楽だがそのかわりこの学校は造りが複雑だ。初めての奴は案内なしに此処には辿り着けない。

「透さん、連れてきたぞ」

扉を勝手に開けて中に入る。広い室内にはソファーと机が向かい合うように置いてある。

机の椅子に座っているスーツを着た優しそうな顔立ちの男。高校だけでなく、この私立全体を統べている理事長、松永透だ。

「久しぶりだね、空遥君。」

そちらが柳原蝶子さんだね。翔子先輩とそっくりだからすぐ分かったよ」

わざわざ立ち上がり彼女と握手する。

「大体の事は聞いたかな」

こくん、と彼女が頷く。

「そう、じゃあ僕が話す事なんてあまり無いかもね。はい、これが学内の地図。ややこしいけど君ならすぐ覚えられるよ。えーと、空遥君、クラスの仕組みは話したの」

透さんの問いに首を横に振る。俺はその仕組みをあまり気に入っていない。

「仕方ないなあ。君はそういう所、滝川先輩に似てるよ」

親父に似てるって言われても嬉しくない。

「簡単に言えば、成績や家柄順にクラスが分けられているんだよ。全部で五クラスでA〜Eまで。Eっていうのはお金だけ払って入れてもらってるボンクラ共」

か、顔に似合わず意外と毒舌なんですけど。ボンクラって…。血は争えないな。

「CとDは大体同じ位の家柄で、成績のいい方がCに入ってる。Bは、成績も家柄もCより上の人達。そしてAは成績が上位三十名の者を入れてるんだ。家柄も皆トップクラスな者ばかり。」

E組はその年によって人数が変わるけど、CとDは大体毎年同じ位の人数でBも少ししか変わらない。でもAだけは毎年どの学年も必ず三十人なんだよ。そのためA組はカリスマ的存在になってる」

「本当に嫌な制度だ」

A組の奴らは大半が自分が一番で自意識過剰な奴。もちろん例外もちゃんと居るが…。

「A組がカリスマ的存在だからこそ問題も起こる。空遥君も最初は大変だったよね。いろんなクラスやA組自身にもやつかまれたり喧嘩売られたり。ただでさえ途中入学は目立つのにA組に入っちゃったから。滝川先輩も昔A組で大変だったらしいよ。」

でも今は落ち着いてるよね。空遥君は不良だし、実家はその筋では有名な極道。いつの間にか「虹」なんていう族を作ってるし、臭いものには蓋的なノリで黙認だよな。」

この人、俺の事嫌いなのかな。

臭いものとか流石に傷付くんですが。

てか、何で「虹」の事知ってたんだよ。訊きたいけどなんか怖い。

「これでも僕達の頃よりはいい方なんだよ。」

A組の次に人気のある生徒会は一・二年から二人ずつ、B組の上位つまり後一步でA組になれなかった者達が務めるんだけど昔は授業が免除できるとか色々待遇されてたんだ。でも綾美姉さんが高校に入った時、うざいって言うて授業免除の校則を廃止したんだ。

とてもいい事とは思うけど、その時は僕の父が理事長で、姉さんもまだ松永の姓を名乗ってたから凄い騒ぎになってね。中学にまで噂が流れて、あの時はまだ純粹だった僕は色々大変だったよ。

昔っから姉さん達にはよく振り回される」

怖いっ。笑ってるけど怖いっ。

姉さん達って、その中に親父も入ってるよな。もしかして何気なく俺にきつくあたるのは母さん達のせいなのか。

一体何をしたんだ。おとなしい人ほど怒ると怖いというが、温和な優しい人だった筈なのに。俺が幼い頃に会った時、飴をくれたじゃないか。

「あの、私は何処のクラスになるんですか」

なんか久しぶりに彼女の声を聴いた気がする。

「そうだったね。ごめんね、蝶子ちゃん」

態度変わりすぎっ。

これでもかかってくらい爽やかに笑ってるぞ。何で皆彼女には優しくなるんだ。

「蝶子ちゃんはね編入テストの点が物凄く良かったんだ。うちのテストって編入させる気ないだろってくらい難しいのに凄いや。

だから文句なしにA組。編入でA組になるなんてこの学校初かもね」

「A組って、ヤバイだろ。編入ってだけで騒がれるのにA組なんか…ただでさえ目立つ容姿なのに」

…しまった。

容姿の事は俺が言うべきじゃなかった。

決して貶すとかそういう意味でいった訳じゃない。むしろ俺は、彼女はとても可愛い顔立ちだし髪の色も綺麗だと思ってる。彼女がどう思ってるかは知らないが、それでもやはり俺なんか言っべきじゃないかった。

ちらつと彼女を盗み見るが、表情に変化はない。それでも俺はとも申し訳ない気持ちになった。

「確かに蝶子ちゃんは美人だからね。色々心配だけど…でも仕方ない。クラス別けは高校だけでなく中学校にもあり、小学校五年生から決められるこの私立のルールだから。

蝶子ちゃん、僕にできる事なら何でもするから何かあったら言っ
ね」

優しい笑顔なのに腹黒く見えるのは何故だろう。

秀が時々見せる笑みに似てる。

「それに空遥君もいるし。

あ、そういえば今朝、姉さんから電話があつてね。空遥君、蝶子ちゃんに投げ飛ばされたんだってね。滝川先輩が大笑いしながら話してくれたよ」

言われた本人である彼女はきよとんとしている。

少しかわい…いい、いやそういうことじゃなくて…。

てか、覚えてないんだな。

「それと、姉さんからの伝言。」

帰ってきたら覚えてなさい、だって」

死刑宣告。

…

…

な、何故だ。

あれか、起きたら彼女が隣に居たのに怒ってるのか。あれは事故だろ。それとも抱きかかえたことか。それがパジャマ姿を見たこと。いや、もしかしたらそれら全てにかも。

どっちにしる俺、死んだ。

「あー、もう始業式終わったかな。」

空遙君で遊んでる場合じゃない。急がないと皆、教室行っちゃうね。空遙君、座り込んで暇ないよ」

透さんに言われて渋々立ち上がる。
始業式、終わったんだ……。

「蝶子ちゃん、はい、これ。」

これはA組の証拠であるネクタイピン。校章が入っててA組だけが付けられるんだよ。チェーンも付いてオシャレでしょ」

「A組だけが…」

そう言っただけで彼女は俺を見る。

その視線を追って透さんも俺を見た。

「いや、あの、これはその…」

俺はというと冷や汗だらだらだ。二人の顔も見れない。

ガシィッ

「あれ、空遥君。これはどういうことかな。」

確かA組がネクタイピンを付けるのは義務付けられてた筈だけど」

こえーっ。怖い、恐いし痛い。

凄う力でネクタイ引っ張られてる。顔は笑ってるのが更に怖い。

「だ、だって、あれ付けてたら視線が鬱陶しいじゃんか」

ぱっと放された。

少しよろける。

「君の場合、付けてなくても視線は変わらないよ。学校一の不良さん。」

そんなこともあるつかと、ここに予備がある。よかったね。今、付けなさい。

蝶子ちゃんもね。付け方わからなかったら訊いてね」

何、この態度の違い。

そりゃ俺が悪かったと思うけど理事長が特定の生徒に特別優しいってどうなんだ。それとも俺に特別厳しいのか。

あ、その両方が。

って、どちらにしてもダメだろ。

「二人共、付けたね。

もうこんな時間だ。空遥君のせいで時間かかったな。君達の担任には連絡しとくから、途中で会うと思うよ。早く行きなさい」

時計を見ると確かに進んでいる。急がないといけない。

適当に挨拶し、扉の方へ向かう。

「空遥君、蝶子ちゃんの事、頼んだよ」

部屋から出る時に聴こえた透さんの声が、本当に彼女の事を心配しているようだったので俺は思わず頷いてしまった。

「行っちゃったか。」

あの二人を見てると昔を思い出すよ。なんかあの四人に逢いたくなくなってきた。

翔子先輩と征兄ゆきさん元気にしてるかな。

空遥君達はこれから大変だと思うけど、がんばってもらおうしかないな。

僕もつかつかしてられない。これから面白くなりそうだよ」「

よつつめ 楽ありや苦あり

やはり始業式は終わっていたらしく、廊下に人が多い。一年は三階にあるため階段で降りることにした。

ここからが問題だ。A組ってというのは必ず一番奥にある。

廊下にいる者が皆、俺達を見てはコソコソと話す。鬱陶しくて仕方ない。

「貴方が有名なのって途中入学やA組だけが理由じゃないんでしょ。朝の長い坂でも視線集めてたの私だけじゃなかった」

やっぱり気付いていたのか。

「E組以外に不良がいるのが珍しいんだよ。」

それと、一応忠告しとくけど西にある三階建ての別館には近付くな。あそこは全学年のE組がある建物で先生すら滅多に近付かない無法地帯だからな」

そこまで言っただけ、と気付く。

そういえば彼女から話を振ってきたのは初めてかもしれない。

今まで彼女のことはどこか大人っぽい印象を受けていたが、こうやって話すとちゃんと自分と同じ年の女の子だ。

「貴方が作ったっていう『虹』も有名なのね」

「いや、それはその筋の人しか知らない。
…何か馴れてるな。普通、驚かないか」

「何で作ったの」

…無視ですか。まあ、言いたくないなら別にいいけど。

「意識して作った訳じゃない。気の合う奴らとつるんでたらいつの間にかできてたんだよ」

これはさっきの事を謝るチャンスかもしれない。彼女は別に気にしてないようだったが俺が気になる。

「さっきは悪かったな。透さんにその…目立つ容姿とか言って。別に悪い意味で言った訳じゃ決してないけど、俺なんか言うことじやなかった」

彼女を見てみると目をわずかに丸くして驚いていた。

何かおかしい事を言っただろうか。

そうこうするうちに彼女はクスクスと笑いだす。

そう、笑ってる。そら彼女だって笑う事もあるだろう。でも何故だか俺は軽く感動してしまった。

「ごめんなさい。不良って謂われてる割に変な所で気を遣うのね。
昨日も雅和さんに隣の部屋になるの反対してたし」

親父の事、結局名前と呼んでんだな。一瞬誰の事が分からなかった。

「よう、お二人さん。やっと来たか」

A組の隣にはエレベーターがある。
そこにもたれて立っているだらしのない格好のがたいのいい男。

「こんにちは、柳原蝶子さん。俺はこのクラスの担任の武山^{たけやま}だ。一応国語を教える。
今後ともよろしくな」
握手した手をぶんぶん大袈裟に振る。

彼女の腕が抜けないか少し不安になった。

「よし。滝川、お前ちよつと先に教室入ってるよ。転校生と一緒にいたら色々怪しまれるだろ」

どうやら武山はこちらの事情を知っているらしい。正直そうしても
らえると助かる。

彼女に一言断ってから俺は教室に入った。

いつ見ても凄いよな。

教室というよりまるで部屋だ。
支給されている椅子が気に入らないとかで自分で椅子を持ってくる
のがこの学校全体の流行りらしい。

色とりどりの椅子。一人用のソファーを使っている奴までいる。
勿論俺は支給されている椅子を使っている。面倒だし、このままでも普通の学校で使われている椅子より断然豪華なのだ。

「おはよう、ハル」

俺に声を掛ける三人。皆A組だが、珍しく気の合ういい奴らだ。

「ハル、お前始業式さぼっただろ」

肩に届きそうな赤茶色の髪の毛の男が恨めしそうに言うてくる。

「ヒロ、お前、俺がどんだけ大変だったか」

そう俺に返された佐和田裕行は訳が分からなさそうに首を傾げる。

「あれ、ハル、ちゃんとネクタイピンしてるんだ。もうしないって言うてなかったっけ」

藍色に染められた髪の毛の三和柚隼みわゆういちの問いに俺はため息を吐くしかない。

「なあなあ、そんなことより今日、転校生がくるらしいぞ。しかもこのA組に」

「ちよ、猿。耳元でうるさい」

黄色に染められた短い髪の毛の少年の隣にいた三和が怒る。

「猿って呼ぶなって言ったじゃん。ユズちゃん」

すねた様に猿と呼ばれた猿渡周さわたりしゅうが言う。

「じゃあ周もユズって呼ぶな。だいたい俺の名前の袖って字はユウって読むんだよ」

「お前ら煩い。ほらもう武山がくるぞ」

転校生から話が逸れたのは助かったが煩い。

ヒロも笑って見てないで止めてくれ。もう、朝からへとへとだ。

「おい、お前ら席につけよ。皆がガン見してる彼女、実は転校生だ。名前は柳原蝶子さん。仲良くな。

席は九瑠野くるのの隣が空いてるな」

彼女が座るのを確かめ武山はホームルームを終わらした。

武山が教室を出た途端彼女の周りに人が集まる。

彼女の席は調度クラスの真ん中。窓際の最後尾にある俺の席からも様子がよく見える。

余談だが、俺の隣の席には三和が居て、前にはヒロ、その隣には周が居る。

彼女の隣の席である九瑠野くるの暁美は確か何処かの金持ちお嬢さんだった筈だが、それを鼻に掛けないイイ奴だと聞いたことがある。他のクラスからも人気があり、ファンクラブがあるとか。

なんで俺がそんな事を知っているのかというと、興味もない俺に噂好きの周や女好きのヒロが煩く話してくるからだ。

「ハル、そんなに柳原さんが気になるんだ。ずーっと見てるね」

うちの学校は始業式の日にも普通に授業がある。

一限目の終わりに近付いた時、三和が話し掛けてきた。にやにやと嫌な笑い方をしている。

「何っ、本当か」

前に居るヒロが何故か反応する。地獄耳なのか。

ていうか、教壇に立ってる数学の吉田がちらつとこっち見てたぞ。ひよろひよるとしたバーコード頭のおっさんだが一体何歳なんだろう。

「今まで女の子に興味なかったハルが、遂に」

現実逃避していたら周まで話に加わっていた。

「くそー、俺も可愛いと思ってたのに」

何でヒロが悔しそうにしてんだ。

「お前ら深読みしすぎ。てか前向けよ。吉田がチョーク粉碎してんぞ」

そんなこんなで一限目が終わる。

お昼休みに失礼します。一年A組の柳原蝶子さん。おりましたらすぐ生徒会室までお越しください。繰り返します

放送が鳴った。

俺は調度購買から帰ってきたところで、教室の入口でつつ立っていた。

皆が俺を怖がって避ける中、彼女が近付いてくる。

「あんた、生徒会室が何処か分かるのか」

普段の俺なら放っておくだろうが、なんとなく気になったのだ。

「大丈夫だよ。私が案内するから。」

私のお兄ちゃん、生徒会長だし」

彼女の後ろからひょいと九瑠野が顔を出す。ウェーブした長い茶髪が一緒になって揺れる。

居るとは思わなくて、軽く驚く。

「ふふ、学校一の不良さんは案外世話好きなのね」

九瑠野がそう言って二人は行ってしまった。

俺は思わずその場に座り込む。自分でもらしくないと、分かっていたやってしまった。他人に改めて言われると恥ずかしい。何なんだ今日の俺は。

朝からずっと案内役として気を遣っていたからその延長で。

一限目に三和にからかわれたのも知らないうちに彼女を気にしていたからだ。さっきのも完全なるお節介。

本当にらしくない。

こんな事で悩んでいることすら。

堂々廻りだ。

そうだ。もしかして初めて特定の女の子と（仲良くとはいかないまでも）親しくなつて、舞い上がっているのかもしれない。

そもそも女の子の接し方なんて知らないし。

とにかくお節介を焼くのはもう止めよう。これから同じ家で暮らししていく訳だし、変な奴だと想われたくない。

よし、完璧だな。

「なあ、ユズちゃん。ハルはあそこで何やってんだ」

「ユズちゃん言うな、猿。

何か百面相したり、ガッツポーズしてるね。はっきり言って、ちょっと痛々しい」

「うわー、流石の俺もちよつと引くわ。あいつってあんなキャラだつて。周りの連中もいつもとは違う意味で避けてんじゃん」

「そうだね。ヒロに引くとか言われたらもう終わりだね」

「え、柚聿それどういう意味」

「てか、もうすぐお昼終わるけどハルは食べないのかな」

猿渡の言葉は虚しく響くだけだった。

よつめの蛇足(前書き)

読まなくても大丈夫です

よつつめの蛇足

お昼は食べれなかったし何故かヒロ達には冷たい目で見られるし、踏んだり蹴ったりだった。

大変疲れていたのでヒロ達の誘いも断わり、独りで帰路を歩いている。

前方に彼女と九瑠野が歩いているが、それは偶然だ。

地獄坂の下で九瑠野は車に乗り込んだ。どうやら家の方向も違ってしまう。

あれ、彼女こっち見てないか。見てるよな。

「買い物に付き合って」

え、今の、俺に言ったんですか。

ぼーっとしているとケータイを差し出された目で見るように諭される。

母さんからのメールだった。

蝶子ちゃん、学校はどうだった？

実は急に申し訳ないのだけれど私とうちの人、用事が出来て夕飯までに帰れそうにないの。それで昨日言った通り、蝶子ちゃんに夕飯の支度を任せることまかになるけど、皆をこき使っていいからね。

成程、買い物って夕飯のか。てか、いつの間にメルアド交換したんだよ。

待てよ、そういえば俺、母さんに死刑宣告されてたよな。よし、上手く免れたか。

あれ、まだ下に何か、

P・S・空遥に伝言お願い。

上手く免れたと思わないことね。次に会った時覚えてなさい、って。

どこの悪役だよ。

そんなこんなで今、近所のスーパーに来ている。

「そういえば、何で生徒会室に呼ばれたんだ」

「私も今日知ったんだけど、知り合いが居たの。うちの両親、顔が広いから」

そう言っただけじゃが、籠の中に入れる。

って、にんじん何本入れてんだよ。籠の中やたらオレンジなんですけど。

その時の俺は籠の中のオレンジに気をとられていたため、周りの注目を浴びている事に全く気が付かなかった。後から考えたら大分と恐ろしい事をしていたと思う。

いつつめ 多勢に無勢

ピリリリ・ピリリリ

ピリ・・・

ピ・・・ ガチャッ

ん、

……朝か。

ふと、横を見やる。

そこには彼女が、

柳原蝶子がおりましたとさ。

もう彼女がうちに来て一週間になるが、三日に二回はこうなる。

流石に馴れるよな。

三回目の時は態わざとやっているのではと疑ったが、彼女にそんな様子は見られない。

幼い頃からの癖らしい。

うちの両親によると彼女程ではないが、彼女の父親もよく寝惚けていたらしいし。

とは云つても、俺は健全な男子高校生だ。

幾ら馴れたといつても間違ひなく美少女に分類できる女の子が一緒の布団に入つてるといふのは、なんかもう色々マズイ。

女子に免疫のない、理性溢れる（別にヘタレとかそんなんじや断じてない）俺だから良かったものの、他の男ならもう危ない所じや済まないぞ。

確実にパクつて食べられちゃいますからねっ。

しかも、彼女はなかなか起きてくれないんだ。

「おゝい、起きろ。朝だぞー」

「……………」

「おゝいつ、起きろって」

……………ボゴッ

「ハブオフッ」

……………起きてくれても完全に寝惚けモードで襲われる。

俺は不本意にも族を創ってしまったが、この世界には一つの伝説がある。

二十何年前、この地域を牛耳っていた族があった。喧嘩で負けたことはない、不敗のチーム。

この地域の秩序を創り、破る者は容赦なく潰す。
今も色褪せる事なく語られる伝説の族『f1y』。

だが、所詮昔の事。

今や秩序なんて存在しない。伝説は伝説、関係ないと思っていたのだが、

「二代目『f1y』ねえ。それくらい強いつて事なのか」

せっかくの日曜日だが俺はいつものメンバーで行き付けのファミレスに居る。

今、二代目『f1y』と噂されている族は半年前に現れたらしい。

基本他のチームに関わる事はないがある程度の道理を外した者は潰されるとか。

その様子や強さから二代目などと呼ばれている。更に驚くべきことに総長が女らしい。

「アゲハ」と呼ばれる総長率いるは『紫蝶』という名の族。

「そんな事より、ハル。お前、柳原さんに何か良からぬ事してないだろうな」

ヒロが身を乗り出す。

そんな事って…。てか、何でお前が訊くんだ。

どうやら月曜日の放課後に彼女とスーパーで夕飯の買い物していた

のを周の母親に見られていたらしく、それを聞いたヒロ達がやたらと煩く彼女との関係を訊いてきた。

「同居してるって聞いた時は驚いたよね」

三和が苦笑いして呟く。

金曜日には全てを喋ってしまった俺を誰が責めようか。

「あれ、ヒロって新しい彼女が出来たんだよね。いいの、そんな事言って」

周からの鋭い指摘。

「ふっ、俺は可愛い女の子全員の味方だからな」

うざっ。

しかもまた女替えたのかよ。二股なんてざらにあるし、取っ替え引っ替えて長くて一ヶ月。何でモテるのか不思議だ。見る目がないとしか思えない。

俺なんて生まれてこのかた彼女なんか出来たことないのにつ。

「そのうち女に刺されるよ」

三和の冷静なツッコミが少し怖かった。

「何だ、あれ。素人相手にケンカか」

「喧嘩って言うよりリンチだね」

すっかり暗くなった帰り道。物寂しげな公園でヒロが見つけた。三和が言うように、一人の男を三人の男が痛めつけているようだった。

可哀想だが自分で何とかしてもらおうしかないな。流石に殺されたりはしないだろ。

って、おい。なんかキラッと光る物取り出したんですけどいじめっ子A。鋭い物が外灯で光ってますよ。

視ていたのがいけなかった。いじめられっ子と目が合う。何でこんな暗いのに表情まで分かったよ。

「くそっ、情けない顔しやがって」

「そこのお兄さん達、何してんの」

「はあ、何お前」

俺の言葉にいじめっ子Bが反応する。

まあ、普通そうなるよね。俺だってさあ、目が合わなかったら絶対放つといたし。

「誰だって訊いてんだよ」

いじめっ子Cが殴りかかってくるのを右に避ける。ついでにナイフを持っていた男を足払いした。

いじめっ子B（あれっ、Aだっけ…）は尻餅をつく。横でいじめられっ子が息を呑んだ。

「お前、まだ居たの。邪魔だから早く逃げろ」

いじめられっ子が戸惑っているのが分かったので、なおも続ける。

「そこにいたら正直邪魔。連れもいるし、俺は平気だから。あ、後、警察とか呼ぶなよ。面倒事はごめんだからな」

いつの間にか側に来ていたヒロ達を見て安心したのか、男はすぐに逃げていった。

「ハル、聴こえたぞ。連れがいるからとか言いやがって」

「いいだろ、別に。久しぶりの運動だ」

「何が、運動だよ。馬鹿ハル。どんどん増えてきたじゃんか」

「うるさい、バカ猿。俺だってこんな予想してなかったんだよ」

「お前ら、相手は四人だ。『虹』の、四彩、を潰せっ」
そう叫んだスキンヘッドを殴りつける。

いじめっ子三人は瞬殺だった。だが、運が悪い事に奴らは何処かのチームに入っていたらしい。仲間を呼んだ。俺達のチームは三ヶ月くらいの新参者で色々他からやつかみもある。

俺達四人は四彩と呼ばれ、ヒロは朱、三和が蒼で周が黄らしい。見たまんまだな。

そんで何故か俺が紫。紫の要素なんて全くないんだが、あの『紫蝶』にも通用する強さということだそう呼んでるらしい。

うちのチームのメンバーの中にはそれを凄いことだと言う奴がいる

が、どうなんだろう。

ヤバイな、敵が多すぎる。

『虹』のメンバーに呼び出しを掛けたら確実に勝てるだろうが、今はあまり騒動を起こしたくない。

どうしようかと考えていたら、喧嘩の騒音の中何故か、耳によく透るその声をはつきり聞き取った。

「これより、『雨旒』を潰すため『紫蝶』がこの場に参加します」

疑問に思った瞬間、敵の勢いが急に弱まる。すぐさま状況を把握した。

『紫蝶』とはこれほどのものなのか。

ふと、目の端に何か見えた。

あれは喧嘩の中心。

暗やみで輝き、動くもの。

あれは、人だ。

その姿を認めた時、俺は一瞬動きを止める。

その瞬間、俺の左腕に痛みを感じた。切りつけられた様だ。

しかし、今そんな事はどうだっていい。

何故、彼処にあの色がある。ありえない。

だが、否定しながらももしかしたら、と想う自分がいる。

だって、俺はあの色を持つ人を一人しか知らない。

もう少しなのに、辿り着かない。敵の多さにイライラする。

急に後ろから人の気配。

避けきれない。

ドカッ

何かが倒れた音。

下には恐らく敵であろう男。

顔を上げるとそこには、

「…やっぱり、あんただったのか」

柳原蝶子がいた。

「っ、しゃがんでっ」

彼女の声に体が反応する。

ドカッ、ドカッ

彼女の回し蹴りが俺の後ろにいた男に見事にヒットする。
な、長い足ですね。

「説明は後でするから」

仕方ないな…。

俺は彼女に頷き、背中を合わせた。

それから十分としない内になんとか片付いた。

彼女に背中を預けてからは随分と楽だった。正直、彼女がこれ程とは思ってもしなかった。

ヒ口達も無事な様だ。

俺がへたり込んでいると彼女が何か持って走ってくる。凄いスタミナだ。

左腕を出すように言われた。

「気付いてたのか」

「ええ、」

器用に薬を塗ってくれる彼女。

「結構深い。血がぼたぼた落ちてた」

うわーお。聞かなきゃよかった。

「あんた、『紫蝶』なんだな」

さつき聴こえた声は今思えば彼女のもの。ということは、

「ええ、私は『紫蝶』の総長。『紫蝶』を率いている」

「アゲハ、か…」

なんだろう、この気持ちは。何か複雑だ。

「でもまさか滝川君が、今一番のルーキー『虹』の総長、紫とはね。理事長が貴方が『虹』を造ったって言った時は驚いた」

「あの時も言ったけど、いつの間にかそう呼ばれてたんだって。

それから滝川君って呼ぶの辞めて。親父達が名前呼びなのに何で俺だけ家の名なんだよ。ただでさえ、『滝川』は厄介な名なんだから気が抜けて笑ってしまう。」

「親や家の若い奴らは俺のこと空遥たかはるって呼ぶし、ダチはハルって呼ぶな」

「遥ひそかな空ひそって書くのよね」

彼女が真剣に考えているのを見ると笑いがこみあげてくる。

「タカって呼ぶのは辞めろよ。どっかの芸人みたいで嫌だ」

そこまで考えなくても、ってくらい考えてる。いつの間にか左腕の治療は終わっていた。

「じゃあ、空ひそ」

「おう。じゃあ俺はあんたのこと蝶ひまひって呼ぶよ」

「『虹』は有名だった。やけに派手なルーキーで、しかも総長が『紫蝶』と同じ色で呼ばれてるから。うちでも随分騒いでた」

俺は苦笑いするしかない。

「何で紫の蝶なんだ」

俺は疑問に思っていた事を訊いてみた。

「紫が好きだから」

そう言っただけで彼女は向こうへと駆けていく。
俺は座り込んだまま動くことができない。

あれは、反則だ。

あんな綺麗な笑顔、今まで見たことない。
うわー、どうしょ。

「ずりいぞ、ハルだけ柳原さんに手当てしてもらって」
ヒロ達三人は離れた所で二人を見守っていた。

「にしても、あのアゲハが柳原さんだったなんてビックリだね」
「『紫蝶』の情報は周でも掴めなかったものな。

でも、これでハルもちゃんと自分の気持ちを自覚したでしょ。絶対ハルは柳原さんに一目惚れしてたし」

「げ、柚隼、それマジかよ」

ヒロが驚くのを見て周が笑う。

「ハル見てたら分かるよ。なんとか抑えてるけど本当は気になってしょうがない様子だった。あの、基本的には放任主義のハルが」

「面白そうなお話ね」

いきなり現れた声に三人は驚く。

「こんばんは。一年A組の問題児さん達」

そこにいたのは同じクラスの九瑠野暁美だった。

「何で九瑠野が此処に…」

ヒロが疑問を口にだす。

「あれ、気付かなかったんだ。ほら、彼処にいるの私のお兄ちゃん」

彼女が指差す方は何人かの『紫蝶』のメンバー。暗くて顔まで分からない。

「確か、九瑠野の兄は」

「そう。生徒会長だよ」

三人は呆然とする。

「私は蝶子ちゃんの事知ってたけど蝶子ちゃんは私の事を名前しか

知らなかった。転校してきた時に初めて会ったの。今は『紫蝶』関係なしで親友」

ニコニコと楽しそうに九瑠野は話す。

「でも、私は表立っては動かないけど一応メンバーになったわ。あ、でもこれは他言無用だから。滝川君には私の事は言っていないよ。でもお兄ちゃんの事は黙っててね。その方が面白いし」

「まあ、確かに俺達もその方が面白いな」

ヒロの言葉に後の二人も頷く。

「にしても、滝川君が蝶子ちゃんに気があるとは……。そうじゃないかな、とは思ってたけど。

滝川君ライバル多いよ。私知ってるだけでも二人はいる。しかも蝶子ちゃんはそういうのに鈍いから」

「これは面白いことになりそうだね」

四人はこれからの友人達に期待する。

「あれ、なんか寒気が」

俺はというと、四人の会話など知らず一人震えていた。

むつつめ 人のふり見て我がふり直せ

あんまり眠れなかった。

昨日、喧嘩の後にヒロ達と話した時、同じクラスの九瑠野も『紫蝶』の一員だと聞いた。しかもよく分からんが生暖かい目で励まされたし。

あー、でも眠れなかった理由は別にある。

我ながらあれくらいでと思うが仕方ない。しかし改めて考えると想いを寄せる相手と一つ屋根の下つてのはどうなんだ。ヒロなんかは泣いて喜びそうだが。

だいたい、どんな顔して会えばいいか分からない。俺が勝手に好きになっただけだし、普通な感じにしなければ。親父達にばれたらおしまいだな。

今日は彼女が布団に来なくて本当によかった。

制服に着替え廊下に出るとちょうど隣の部屋から彼女が顔を出す。

「ち、蝶、おはよう」

「おはよう」

少し吃^{ども}つたがセーフだ。

昼後の数学ってどうしてこうもだるいんだろうか。

「柳原、黒板の問題解いてみて下さい」
教師の台詞に蝶が立ち上がる。

「…あのさあ、ハル。ちょっと動揺しすぎ」
三和が横から呆れた顔して言ってくる。
何言ってるんだ。俺は無茶苦茶クールだぞ。

「まさかあのハルがこんなに惚れた女に弱いとはな。ウブだねえ」
「仕方ないよ。ナンパ者のヒロとは違ってハルは初恋なんだから」

ゴカッ

とりあえずヒロと周を殴った。

「いったあゝ。おいつ、いきなり何すんだよつ。俺の顔に傷でも付いたらどうすんだ。お前は女の子達を泣かす気かっ」

「うっさい。お前を取り巻く見る目のない女なんてどうでもいい」
「うわっ、そうだよ、そういう奴だったよお前は」

「あつ、吉田がキレる」
隣で三和が呟いた。

「き・さ・まらーっ、
そんなに私の授業はつまらんのかっ」
白い凶器が宙を舞う。

「遂に吉田が滝川達に乱心したぞー」

「吉田伝説のチヨーク乱れ打ちだっ」

一気に騒がしくなるクラスメイトだった。

ちなみに周は机に伏したまま。

あり、力加減間違ったか。

それを見付けたのは本当に偶然だった。帰ろうと一人で廊下を歩いていたら、中庭に見知った姿を見付けた。

彼女は他に何人かの女子と話していた。しかしどう見ても様子がおかしい。

気付かれないようにそっと近付いて行く。

「あのさあ、A組だからってちょーし乗ってない」

「急に来たかと思えば、A組になって。どうせ大した家柄でもないんでしょ」

「私達い、B組なんですけどお」

三人の女生徒が蝶に向かって話していた。聞いてるだけでイライラする口調だ。ネクタイから見て同学年だろう。

B組といえば確かに家柄は上等だ。だが、その女達はとてもそうは見えない。鼻屑目を抜いても蝶の方が上品だ。

というか、これはもしかしなくても難癖付けられてるんだよな。

「だからさあ、アンタもう夕夜様ゆいさまに近付くなっつてんの」
女の一人がダルそうに言う。

夕夜様…はて、どっかで聞いた気が……。

「だいたい他の生徒会メンバーとも馴れ馴れしいんだよ。言っとくけどあの人達がアンタに構うのはアンタが編入生で珍しいだけだから」

生徒会メンバー…。

思い出した。非公認のファンクラブに夕夜様と呼ばれる二年の九瑠野夕夜はこの高校の生徒会長だ。

「どうやってこの学校に潜り込んだか知らないけどおアンタがA組だなんて私達は認めてないからね」

散々酷い事を言われているのに蝶は黙ったまま何も言わない。俺だつたら絶対反撃してる。

出るべきだろうか。しかし女の喧嘩に俺が出ていったら蝶の立場が余計に悪くなるかもしれない。

俺が悩んでいる間も女達は蝶に詰め寄る。

「アンタみたいな娘がいる柳原の名も聞いたことないし、良い家柄じゃないんですよ。」

その髪だつてさあ、染めてんの」
そう言つて女の一人が彼女の髪を引っ張る。

それを見て、俺は飛び出た。

三人の女生徒だけでなく蝶も驚いていたのが分かったが、今の俺はそんな事気にならない。さっきまで悩んでいたことが嘘みたいに頭

が真っ白になっていた。
ただ、蝶の髪に触る手が許せなかった。髪の色を蔑む言葉が信じられなかった。

気が付いた時には髪を掴む女生徒の手首を捕えていた。
加減が出来なかったため女の顔が痛みで歪む。

「ちょ、ちよつと、アンター一体何な訳っ」
女の後ろにいた二人が声を上げた。

その声で一気に冷静になった俺は女の手を放し、蝶をかばう様に後ろにして三人と向かい合った。

「あー、えつと…、…性悪女から弱い女の子を守るヒーロー？」
おい、そんな目で見るな。俺だって言った後で自分で痛い奴だと思つたよ。怖くて後ろ見れねえ。

「あれ、アイツってもしかして滝川じゃないの。E組以外で学校の不良って云われてる奴じゃん」
「何でそんな奴がアイツを助けんの」

うわー、思った通り蝶の立場が悪くなる。
どうしようか、と考えていたら声が割り込んできた。
誰だと思って見てみるとそこには意外な人物、九瑠野夕夜が立っていた。

「君達は一年生か」

何故か俺達と向かい合って立つ三人にだけ尋ねる彼は、少しウエーブがかった茶髪だった。誰かと似てる。

「夕夜様、私達あの人達にからまれていたんです」
三人組が会長にすり寄る。

はああ。何言っただコイツら。

ヒ口を取り巻く女達もこんなだった。俺が最も嫌いな種類の女だ。

「嗚呼、もう君達は帰りなさい」
会長の言葉に不満そうだが女達は従う。こちらを一睨みするのも忘れずに。

ふと気付くと会長がこっちに来ていた。何を言われるかと身構える。

「アゲハーっ。大丈夫だったかい。あー、もう、本当にごめんね」

いきなり蝶の手を掴んで心配しまくる会長。心なしか涙目になっているその姿は先程とは別人だ。ちよつと引く。

「るの、空が困ってる。とりあえず生徒会室に行かせて」

蝶の冷静な反応でなんとか話しが進みそうだ。

会長から舌打ちが聴こえてきたが、きつと気のせいだ。

…幻聴だと信じたい。

生徒会室は四階にある。

エレベーターの中では蝶にお礼を言って貰えた。その横では会長が明らかにすねた様な顔をしていた。

やっと着いた生徒会室のドアに会長が手を掛けた時、中から凄い勢いでドアが開かれた。必然的に会長はドアに激突する。

「あ、アゲハだー。待ってたよお。大変だったね」

中から飛び出してきたのは小柄なショートカットの女の子だった。赤いネクタイで腕に赤茶の帯を付けてるって事は、同学年の生徒会メンバーか。

「そっちの君が滝川君だね。どうぞ、入って。

あー、ゆや君なら大丈夫だから」

蹲すわる会長を見下ろしながら言ったところをみると、どうやら、ゆや君、というのは会長の事らしい。蝶は、るの、と呼んでたし呼び方がいっぱいあるんだな。

「今日は私とゆや君しか居ないから、寛くわいでね」

通された部屋は広かった。上等なソファも置いてある。少し迷ったが、二人用ソファに座っていた蝶の隣に座らせてもらうことにした。

「えっと、まず自己紹介ね。私は早瀬花厘^{はやせかり}。会計をやってます。ちなみに中学まではA組だったんだよ。滝川君が来たから今はB組だけだね。アゲハが編入してくるなんて予想外だったからなあ、惜しいことした」

心底残念そうにしてるのを見てると何だか悪い事をした気になってくる。

ていうか、さつきから気になっていたんだが…。

「蝶の事、アゲハって呼んでるよな」

「あれ、気付いてなかったんだ。あ、もしかして曉美ちゃんが口止めたのかな」

「だってあつさり言っちゃったらつまらないでしょ」

声のした方を見るとドアの所に九瑠野曉美が立っていた。その横には九瑠野夕夜が。

ああ、そうか。会長を見た時誰かと似てると思ったが、こうして見るとそっくりだ。二人は兄妹だった。

居心地悪い。さつきから凄い視線を感じる。

俺と蝶に向かい合って会長と早瀬が座り、左側には皆を見渡せるように一人用ソファーに座る九瑠野がいる。

今は早瀬が煎れた紅茶を飲んでいるんだが、俺にテーブルを挟んだ右斜め前から視線が突き刺さる。

「お兄ちゃん、そんなに見つめたら滝川君に穴が開くわ^あ」

九瑠野の台詞に慌てて顔を反らす会長。

あんた本当に年上ですか。

「ごめんね。お兄ちゃんて私に対してもなんだけど凄く過保護な所があるの。蝶子ちゃんには特に。」

恋愛感情ではないけど一種の親ばかみたいなものだから、ある意味強敵。頑張ってね」

最後の方は小さな声で耳打ちされた。

「ところで、お兄ちゃん。蝶子ちゃんに喧嘩売ったのってお兄ちゃんのファンクラブなんだよね。最近騒いでたのは知っていたけど。私、図書室なんかに行くんじゃないかなかったね」

九瑠野兄妹と早瀬を見ていて分かった。この人達は本当に蝶を大切に想っているんだ。

「誰のせいでもないわ。この話しはもう終わり。それより、空に説明する方が先でしょ」
蝶が仕切り直す。

「空、もう分かったと思うけど暁美だけでなくて此処に居る二人も『紫蝶』のメンバーなの」

ああ、やっぱり。

「『紫蝶』には幹部が四人いてね、今居ない二人も合わせて生徒会メンバー全員がそうなんだよ」

早瀬の言葉には更に驚いた。生徒会長だけでも驚きだというのに全

員とは。『紫蝶』は族の知名度は高いというのにその反面メンバーの顔は全く知られていない。

「俺なんかに言っていていいのか」

「いいよ。空以外の四彩には昨晚曉美が教えたし」

九瑠野は苦笑している。

「アゲハが居候してる家の息子が、紫だと知った時『虹』にばれるのは時間の問題だと思ってたんだ。だから昨晚加勢したんだよ。ちょうど『雨旒』は潰そうと思ってたし。

今までは正直『虹』に余り興味なかったんだけどね」

ニコニコと笑って早瀬が言う。

俺が怪我した左腕にはまだ包帯がある。

「空になら言っても大丈夫だと思った」

ずるい。そんな風に蝶に言われたら、俺に出来る事なら何でもしたくなってしまうではないか。

ななつめ 灯台、下暗し

俺は何か悪い事をしただろうか。

学校から帰ってきたら家の前に同じ年くらいの少年がいた。

明らかに家を覗き込んでいる。怪訝に思いながらも声を掛けてみた。

「おい、お前何してんだ。俺がこつ言つのもなんだが、この家にあ
まり近付かない方がいいぞ」

短髪の少年は振り返る。

「俺も出来れば関わりたくない。でも、この家に用があるんだ」

「ふん。まあ何でもいいけど。今親父居るか分かんねえぞ」

家に入ろうとしたら腕を掴まれた。何だ、と思い少年を見る。

「お前、もしかして此処の息子か」

その言葉に戸惑いながらも頷く。

「そうか…」

呟いたかと思うといきなりそいつは殴りかかってきた。咄嗟に左手
でそれを塞ぐ。

肩に掛けていたかばんが落ちた。

「何なんだいきなりっ」

後ろに下がって間合いを取る。

騒ぎを聞き付けた家の奴らが出てきた。

「テメー、若に何しやがる」

「うるさい。俺の狙いは滝川、お前だけだっ」

今度は蹴りを入れてくる。やけにきちつとした蹴り方だった。綺麗すぎるというか…、空手か何かか。

反撃しようと右腕を振り上げるが、誰かに拳を抑えられる。怪訝に見るとそこには薄黄色のセーターを着こんだ蝶がいた。

「蝶」

「柳原っ」

横で八毛った少年を見る。

「お前、蝶と知り合いか」

「柳原っ、やっぱり此処に居たんだな」

無視かよ。

「空遥、大変だったな」

秀と辰が近くにいた。何故かスーパーの袋を持っている。

「ああ、これですか。これはお嬢さんが学校帰りに夕食の材料を買って来られたようで、」

「何っ、お前ら柳原の手料理食ってんのか」

横からさっきの少年が割り込んでくる。

「そうだけど…、お前は一体蝶とどんな関係なんだよ」

「お前こそさっきから柳原の事を蝶なんて呼びやがって、何様のつもりだ」

…話が進まない。

「もう止めて、羽杉^{うっすん}。」

ごめんなさい。彼は羽杉かなた。私の幼馴染みになると思う。

羽杉、何で空に喧嘩売ったの」

蝶から顔を反らす羽杉。それを見て蝶は小さくため息を吐いた。

「まあ、良いじゃないですか。きっと彼なりの空遥への挨拶なんです。若い男には良くある事ですよ。

そんな事よりお嬢さんの幼馴染みとあつては蔑^{ないがし}ろにする訳にもいき

ませんね。上がって行かれますか」

嫌な沈黙の中、秀が口を開いた。

その台詞に俺達だけでなく羽杉までもが啞然とする。

どんなに擦れた奴でもあんな挨拶はしないだろ。

「そういうものなの」

「はい」

蝶だけは何故か納得したようだった。

結局羽杉は帰っていった。

蝶の幼馴染みと言っていたが、どうにも俺を敵視していたようだった。

思えば自分と同じ年の奴が家に来たのは蝶以外では初めてだ。その度胸は評価するが、やはり気に入らない。出会い方に問題もあるが何より蝶の幼馴染みだというのがむかつく。

居間に向かうと親父が帰ってきていた。台所には蝶と母さんが居て何だか和む。

「空遥、羽杉の息子が来たらしいな」

秀にでも聞いたのだろうか。それにしても、まるで知り合いかのような口振りに面食らう。

「征久の後ばつかり追っていた金魚のふんの羽杉かなめの息子が。さて、どう出るかな」

親父の呟きは残念ながら俺の耳には届かなかった。

「今日B組に編入生が来たらしいぞ」

「ふーん。こんな中途半端な時期に。」

本当は凄い事なんだろうけど柳原さんの後じゃ霞むな」

周と三和が話していたことなんて正直気に止めていなかった。そんな事より俺の睡眠の方が大切だ。

そんな時、ドアが乱暴に開かれる音が聞こえ、ツカツカと誰かがこちらに歩み寄る。

バンッ

耳の近くで大きな音が鳴り、顔を上げるとそこにはつい最近見知った人物がいた。

周りは騒然とし、三和達も固まっている。

そんな中、俺は最も気になった事を訊いてみた。

「手…、痛くないのか」

「…痛い」

完全に力加減を間違っって手を置いた羽杉かなたを見て、俺はコイツが憐れになった。

「んで、なんでお前が此処に居んだよ。というかこの生徒だったのか」

「馬鹿か。柳原の幼馴染みだって言ってるだろ。今日編入してきた

んだよ」

いや、馬鹿はお前だろ。

「羽杉？」

聞こえた声に二人して勢いよく振り返る。

ドアの側には僅かに首を傾げた蝶とニコニコと笑う九瑠野がいた。

「空に挨拶していたの？昨日みたいな事は他の人が驚くから控えてね」

最近確信した事だが蝶は少し常識が抜けている。

「そうだった。今日、羽杉君の一人暮らし記念で皆で騒ぐんだけど良かったら滝川君もどう？」

そして九瑠野は押しが強い。

隣で羽杉の顔がひきつっていた。

やっつめ 百聞は一見に如かず(前書き)

電源には気を付けて。

やつつめ 百聞は一見に如かず

「でけー、マンション」
目の前の建物を見上げる。学校から少し距離のある位置にそれはあった。

「こんなに買つてどうするんだ」
両手には近くのデパートで買い込んだジュースや菓子があつた。学校から直接来たので重い。
本当なら今日はうちの族で集まりがあつた。しかしヒロ達が気を使つてくれたのか俺は行かなくてもいいと言つてくれた。元々大した用事もなく、唯集まつて騒ぐだけだったので問題もない。

「後から四人来るから」
さらつと九瑠野が新事実を言いやがつた。流石に迷惑なんじゃないかと羽杉を盗み見たが平然としているようなので大丈夫なのだろう。

五階にあつた羽杉の部屋は一人暮らしがもつたいないほど広かつた。所々に段ボール箱があるのは仕方がないことだろう。
実は他人の家に入るのが初めての俺は僅かながらに緊張した。

「ちつ、来やがつたか」
皆で寛いでいるとチャイムが鳴り、羽杉が舌打ちしながら玄関に向かう。

「そついえば誰が来るんだ。俺なんか居ていいのか？」
俺の問いに二人はあっさり頷く。

「二人はもう滝川君も知ってるよ。他の二人も顔は見たことあるんじゃないかなあ」

九瑠野の言葉に考え込んでいるとバタバタと何人かの足音と羽杉の制止の声が聞こえた。

「アゲハーっ」

勢い良くドアを開け突っ込んできた会長。

「ゲハッ」

九瑠野により足を引っ掛けられ撃沈。

「本当になるのは仕方のない奴だなあ」

聞いたことのない男の声にドアを見上げる。

「おお、君が滝川か。『虹』の頭の、紫」

通り名を呼ばれ思わず反応してしまう。

「ちょっと、はー君。今そついうのは無し。滝川君困らせて遊ばないの」

早瀬の言葉にサングラスの男は両手を上げる。

よく見たら制服に赤いネクタイをしており同学年だと判った。サングラスや着崩した制服のせいかな高校一年には見えない。

「ごめんね滝川君。はー君、もとい早瀬はやせはかり葉狩は生徒会書記をやっている、私の双子の弟なの。二卵性だから全然似てないけどね」
弟というのも意外だった。身長差も手伝い、どっちかっていうと兄妹に見える。

「悪かったな滝川。氣い悪くしないでくれ」
口元を弛めながら葉狩が謝った。

「あんたら、霞呀かすみの事忘れてないか」
奥から羽杉が呆れたようにして現れた。その隣には長細い包みを背負った、小柄な少年が困ったように立っている。

「あーっ、錐先輩」

「悪い、忘れてた」

流石双子、息もぴったりだ。

「彼は生徒会副会長で剣道部の部長にもなった霞呀かすみ錐先輩。こう見えてゆや君と同じ二年生だよ。ちなみにかなた君の従兄弟いとこだよね」
「改めてよろしくお願いします」
ぺこりと霞呀はお辞儀した。

よくよく考えると此処にいるのは皆、紫蝶の重要人物。改めまして氣付くと変に意識してしまう。

「お前、さつきから何で挙動不審になつてんだよ。馬鹿か」
左側に居た羽杉の言葉にムツとする。

「羽杉君、言葉遣い悪い」

俺の右側、羽杉の正面に居た九瑠野が注意した。羽杉は知らん顔だ。

「ごめんね。意識してしまうのも仕方ないことだよね。」

今回滝川君を誘ったのは葉狩君や錐さんも貴方に会いたがっていた

からの。もちろん『虹』の、紫、にはなく、『柳原蝶子』の居候先の息子、滝川空遥、に。滝川君も知ってるでしょう。『紫蝶』は他のチームと喧嘩以外では関わらない。だから安心して」

そう、『紫蝶』は他のチームには関わらない謎の多いチーム。蝶の事が無ければ俺はこのメンバーを決して知ることはなかった。

ガタンッ

ん？何の音だ。

「お、おい。誰だ霞呀にカフェオレ飲ませたの」
羽杉の声が上擦っている。

何事かを見ると、羽杉の横に座っていた霞呀がテーブルに突っ伏している。

と、思ったら勢い良く立ち上がった。側に有った長細い包みから木刀を取り出す。

「やばい、確実に酔ってるぞ」

嗚呼、木刀が入っていたのか、とぼんやり思っていると羽杉の言葉が耳に入る。

疑問に思う前に霞呀が木刀を振り上げた。

「おい、何だよ此れはっ」

俺の叫びに早瀬の片割れが答える。

「いや、きいて特異体質でさあ。コーヒーで酔うんだよ。しかも酔い癖悪くつて。今回はカフェオレなだけマシだけどなあ」
酒は平気なのに、という未成年にあるまじき台詞は聞かなかったことにする。

「でもまあ、安心しろ。もうすぐ電池が切れるから」
葉狩の言葉と同時に霞呀がその場でうつ伏せに倒れた。いきなりの事に驚く。

「一通り暴れたら電源が切れた様に眠るんだよ」

「じゃあ、錐の事頼むよ」

会長の言葉に羽杉は全てを諦めた様な顔で頷いた。

俺達はマンシヨンの下に来ていた。霞呀は酔った後はしばらく目覚めないらしく時刻は十九時となり、夕食まで世話になる訳にはいかないと引越し祝いはお開きになったのだ。

これから霞呀に破壊された部屋を片付けなければならぬ羽杉には同情する。

俺達を下まで送ると羽杉は俺と蝶を見て少し渋っていたが、九瑠野に諭され帰って行った。

「そつだ、ゆや君。今日は久々にゆや君の家で夕食したいな。もうお迎えは呼んでるんでしょ」

突然の早瀬の申し出に会長は困った様子もなく承諾する。

「おお、良いねえ。ならついでに泊まっていくな。花厘、一緒に寝ようぜ」

「な、葉狩、それは駄目だッ」
会長の尋常ではない慌てっぷりに葉狩は口元をにやつかせた。

「いいじゃねえか。俺達は双子の姉弟なんだし。別に変じゃねえだろ」

「で、でも、年頃の男女に変わりはない訳だし…、と、とにかく駄目だーッ」

少し離れた所で二人のやりとりを見ていた俺は、ふとした疑問を隣に居た蝶に聞いてみた。

「なあ、会長と早瀬ってやけに仲が良いな」
俺の問いに蝶はすぐに応えてくれる。

「九瑠野家と早瀬家は親同士も仲が良く、物心ついた頃にはよく四人で遊んでいたって聞いた。それに、るのと花厘は婚約者だから」
「へー、…て、えっ」

最後の単語に驚いて蝶を見る。首を傾げて俺を見上げる蝶。
……………可愛い。

「おーい、滝川くん」

近くで聞こえた声にはっと我に還り、慌てて蝶との距離をとった。

「あっ、やっと気付いた」
声の主は九瑠野だった。

「ごめんなさい。本当は蝶子ちゃん達も送って行きたいんだけど、迂濶に私達が滝川の家付近に近付くわけにはいかないから…」

申し訳なさそうに九瑠野が言った。向こうを見るといつの間にか白いリムジンが停車していた。その横では未だ会長が葉狩に遊ばれ…もとい、言い争っていた。

申し訳なさそうにしている九瑠野に目を向ける。仕方のない事だ。大きな企業を持つ家柄が滝川にそう易々と近付いていいものではない。

「分かってる。あんたらとは方向も逆だし、俺の家は此処からそう遠くもないからな。蝶の事も心配するなってあの過保護な会長に言っておいてくれ」

あえて軽く返すと九瑠野は微笑み、蝶にさよならを言って車へと向かった。

心配そうにしている会長達を車に押し込み、最後に手を振って車に乗り込む。

リムジンが走り去ると俺達も歩き出した。

「何ていうか、個性的な奴らだったな」

ヒロ達がまともに見えるくらいに。

流石と言うべきか、これでいいのか紫蝶&生徒会。

「いや、あの、うん。」

あれでも、いい人達だから。ちゃんと統括力もあるし」

珍しく蝶の歯切れが悪い。どうかしたのかと隣を見ると蝶は僅かに顔を伏せている。

そんな蝶の様子に俺は焦る。

「えっ、いや、別に悪い意味じゃないからな」
だったらどうゆう意味なんだと問いたくなる。個性的だという言葉はあまり良い意味では使わないだろう。しかし焦っている俺はその事に気付かない。

「分かってる。怒ってる訳じゃないから」

蝶はそう言うってくれたがそれだけじゃ俺の焦りは収まらない。だって、普段の蝶からは考えられない反応だ。

その時、街灯で蝶の顔が照らされた。

頬が微かに赤いのは見間違いだろうか。いくら秋になったといっても頬が染まるほど夜風が寒い訳ではない。

もしかして、照れていたとか。

一気に自分の顔に熱が集まる。

彼女がとても可愛いらしいものに想えた。

それと同時に、彼女にこんな顔をさせるあのメンバーに軽い嫉妬を覚えたのも事実。

余談だが、携帯を家に忘れていた蝶は遅くなることを伝えていなかったらしく、家の周りは組員達で大騒ぎとなっていた。蝶がどれだけ皆に慕われているのが窺える。蝶が夜に出かける事は許しているのに、学校からの帰りが遅いのがこんな騒ぎになるとは。ちなみに俺はどんなに遅くなろうと心配はされない。

電源が切れていた俺の携帯には数十件の両親からのメールや電話。親父からのメールなんて珍しい。もちろん内容は全て蝶に関してだった。

連絡のとれなかった俺に両親から皮肉や嫌味がとんできて軽く泣きそうになったのはここだけの秘密だ。

1111のつ 親しき仲にも礼儀あり(前書き)

この話の中ではまだ二ヶ月程しか経ってないことになりますね……
更新がんばります。

「このつ 親しき仲にも礼儀あり

この学校の文化祭は十月の終わりに行われる。

「おい、こらっ、そこの三人組ッ、どういう事だ。説明しろッ」

俺はとりあえず目の前に居た悪友三人の一人、ヒロの首元を掴んで揺すった。

「うわ、ちよっ、ま、待て、、き、気持ち悪」

「気持ち悪いだと、ゴラァ」

そんななん自分が一番分かってんだよ。お前らが着替えろっつたからこんな格好してんじゃネエかッ」

「落ち着けて、ハルッ。ヒロは別にハルの事を言ったんじゃないってッ。ハルがヒロを物凄い勢いで揺らすから酔いそうになってんのっ。

て、え、ヒロっ、白眼剥いた」

周が必死に俺を止めるので仕方なく手を放してやる。重い物が落ちる音がした。

「だいたいお前らのそれは何だ」

俺はアホ三人組の頭を指差す。皆同様に一対の角と白い獣耳を着けている。

「あれ、判んないかな。せっかく気を遣って白いスーツ着てるのに」

「やっぱり少し無理があったな。でもハルのは分かるでしょ」

三和の言葉に俺はおもいきり顔をしかめる。

今日は文化祭の初日だった。いつものように一人で登校したはずが教室に入ったとたん馬鹿三人組に拉致される。この学校には体育がないのだが、更衣室はある。しかも何故かクラスごとに。

そこで差し出されたものは黒のスーツ。まあ、これはいい。そして教室に戻り、無理矢理着けられた茶色の獣耳&しっぽ。

「いやあ、ハル、なかなか似合うよ、狼」

無邪気に笑う周をすんげえ殴りたい。

よく見ればクラスの他の連中も皆、奇怪な格好をしていた。

「うちのクラスの出し物は、中庭の一角での喫茶店」

「それが何でこの格好に繋がるんだ」

三和の説明に首を傾げる。ちなみにヒロは床でぐったりしたまま。

「だってそれは、テーマを御伽噺おとぎばなしにしたから。設定は御伽の国の喫茶店なんだよ。」

ハルも知ってるだろ。この文化祭は生徒だけの祭じゃない。親が子供の活躍を見て、経済力や営業力を確かめ、他家へのアピールもする。だから皆、より目立つものをするんだ。ハルもこの学校に入ったからには逃げられないよ」

「だからってそんな喫茶店にしなくてもいいだろ。だいたい俺はこんなテーマ初めて聞いたぞ」

「ああ、それは決める時、ハルが寝てたから」

そう言われると何も言えなくなる。

「んで、何で狼なんだ」

俺の問いに周がよくぞ訊いてくれました、という顔をする。

「よくぞ訊いてくれました」

てか、言った。

「俺達は四人セットで題名は『三匹の子ヤギ』」

あれ、ヤギだったんだ。

「じゃ、ねえーよつ。なんだよそれ。んな物語あるか。」

お前、三匹の子ブタと七匹の子ヤギ混ぜってんだろ。

おい、何だよその今気付いた、って顔は」

俺は重いため息を吐く。

「まあ、いいんじゃない。どっちも似たような話なんだし。結局狼なんだし」

三和、お前絶対知ってて言わなかったろ。

「四匹いなくても、もう狼が食べた後ってことで」

「お前ら適当だな。騒ぎたいだけだろ」

もうどうでもよくなってきた。

その時、急に教室がざわめく。

皆の視線を追うとそこには赤い膝までのスボンとフリル付きのブラウスに赤いリボンをした、頭にうさぎ耳のある九瑠野と、青いワンピースを着てエプロンを着けて頭には同色のリボン付きカチューシャをした蝶が立っていた。

「九瑠野達は何の話にしたの」

いつの間にかヒロが二人の側に立っている。

「不思議の国のアリスよ。蝶子ちゃんがアリスで私が時計うさぎ」
そう言つて九瑠野は首に懐中時計をぶら下げた。

「へへ、二人共良く似合ってる。特に柳原さんなんて物語からそのまま飛び出して来たようだよ。良かったら俺と一緒に、」

「おらああ」

「うわっ。危ねえな、ハル」

チッ、俺の回し蹴りを避けやがったか。

ガガッ

皆さん、おはようございます。生徒会長の九瑠野夕夜です。

放送に教室の女子が騒ぐのが分かった。A組の中にも生徒会ファンはいたようだ。

今年も二日間、素晴らしい文化祭にいたしましたしょう。
では、文化祭を開催致します

松永透は理事長室の扉を開けると一瞬眼を見開き、ため息を吐いた。

「どうしてあなた達が此処にいるんですか。親族は午後からですよ」

「堅いこと言うな。あんたとあたし達の仲だろ」

部屋の中には二人の女性がいた。

一人は肩までの髪にピンクのメッシュが入りサングラスをしていて、もう一人は腰までのウェーブの茶髪を風に游がせていた。

「ばら園、綺麗にされてるじゃない。嬉しいよ」

透も彼女達の視線を追って中庭を眺める。

「そういえば、あれはあなたが作ったものでしたね。」

今も生徒会が管理していますよ」

その言葉にサングラスの彼女が微笑む。

「ところで、何故あなた達がわざわざ此処へ？」

「松永君も人が悪いわね。分かっけていて聞くななんて」

そう言った茶髪の女性はソファに座りお茶を飲んでいた。

一体どうやって用意したのが物凄く気になったが、つつこむものか、とあえて話をそらす。

「そういえば、お二人の旦那方は旅行に行っていていらっしやるのか」
「ええ、よく出張だと言って二人で遊びに行ってしまうのよ。困ったものだわ」

「あの二人は変に気が合ってるからね。松永もうちの旦那と仲良いだろ」

「梁斗はりととは幼稚園からの付き合いですから。というか、そもそもあの二人と仲の悪い人なんていないでしょう。

そうそう、あの人達、何処の国に行ってるか知ってます？

イギリス、だそうですよ」

二人が驚いたのを心配で読み取り、透はほくそ笑んだ。

とら 言わねば腹ふくる(前書き)

思っていることを言わずに我慢すると、食べ過ぎて腹がふくれているように気分がスッキリしないということ。byことわざ辞典

とう　　言わねば腹ふくる

中庭にはうちのクラスのほかに二年のA組もいた。離れた所に位置する其れは、どうやらうちと似たような出し物らしい。

和気あいあいと準備に務める大勢の生徒達でいっぱいになり、どこか浮足立つ雰囲気は中庭を明るくさせる。

でもまあ、その中にも例外は居た。

「ハル、顔恐い」

困り果てたような顔で周が言ってくるが俺は無視する。

「俺達は馴れてるからいいけど、それじゃあ来る客も来ないよ。少しはヒロを見習えば」

三和が指差す先にはルンルン気分で女子に喋り掛けているヒロがいる。

「そつだ、宣伝係なんてどう？」

ほら、この看板持って校内を歩いてきたら

周が何処からか看板を持ってきた。

「成程。此処で仏頂面して立っていられるよりマシだな。もちろんハルだから客引きには逆効果だろうけど……」

全くもって余計なお世話だ。

「あつ、丁度いいところに適任者が居た。周、彼女呼んできて」

周には三和の意図することがわかったようだ。指でOK、と合図して走っていった。

ほとんどの生徒がそつだがヒロ達三人も例外ではなく、この私立に小学校から通っている。特に三和と周は成績順のクラス分けがまだ無い、小学校低学年からずっと同じクラスだったという腐れ縁で、

なんだかんだいっても仲が良い。

「連れてきたよ」

周の声に振り向くと、その後ろには蝶がいた。

「な、何で蝶が」

俺の言葉に蝶も首を傾げる。

「ハルだけだと全く宣伝にはならないから。悪いけど柳原さん、ハルと一緒に校内回ってきてくれないかな。柳原さんがいれば、ハルの効果も和らぐから大丈夫だと思うんだよね。」

はい、ハルには看板」

有無を言わさぬ調子で三和は俺に看板を押し付けてくる。木で出来た看板は想像より重い。

三和はわかっかけていてやっているに違いない。ああやって頼めば蝶は断らないだろうし、俺も行くしかなくなる。周もそれを悟って蝶を連れてきた。

俺は遣り切れない気持ちをため息にのせて吐きだした。

「ハル怒ってたね。いいの？」

周は笑いながら三和に話しかける。

「いいよ、別に。ハルの怒りは持続しないから。」

それに最善の策だ。あのハルに接客させたらこっちの胃に穴が開く」

その言葉に周は僅かに眉を寄せる。

「そうかなあ。仕事はこなすと思うけどな」

「ハルにもだけど、ハルに対する人の態度にもだよ」

それを聞いて周は一瞬目を見開いた後、後ろからおもいきり三和に体当たりした。

「うわっ、ちょ、猿、殺す気か」

三和の怒声にも怯まず周は三和の肩を組む。

「ユズちゃんは友達想いだな」

笑う周を見て、三和は照れたように顔を反らした。でもそれも一瞬のことですぐに不敵に笑う。

「逆にハルには感謝して欲しいな。理由はどうあれ柳原さんと二人でいられるようになったんだから」

「そうだよー。こうでもしなきゃハルから誘うなんて絶対無理だし。ナンパ者のヒロとは違って初つづだから。」

実は俺はそっちの狙いの方が大きくて柳原さんを連れてきたんだ。

あっ、噂をすれば」

前を見るとヒロが此方に手を振り呼んでいる。

周は手を振り返しながら小声で三和に話し掛けた。

「ヒロ、絶対羨ましがるから。宥なだめるの手伝ってね」

集まる視線はまるで針の筵むしだな。眉間に皺を寄せてしまっても致し方ないことだろう。それが余計に怖がらせると分かってはいるが。

ていうか、俺のはいいとして蝶に集まる視線のが腹立つ。こいつら絶対俺が居なかったら声掛けてんだろ。

「空、そんなに看板重いの」

「え、いや別に。何で？」

「すごい顔してたから」

す、すごい顔ですか。嗚呼、何でだろ。軽く傷ついた。

「空、」

うええ、ちょ、何。近い、ちかい。

「耳、ずれてる」

ひょいっと頭に着けている犬耳を直してくれた。

ああ、そっちですか。いやいや、別に期待とかしてないけどね。

「学校が大きいだけあって文化祭も力入ってる。私の中学ではここまでじゃなかったけど、それとも高校だから？」

「多分此处は特別だろ。」

実は俺、文化祭に参加すんの今回が初めてだからな。あんまり馴れてねえんだ。こういう事」

俺は苦笑いを浮かべる。

「高校からこの私立に入ったって聞いたけど、通ってた中学に文化祭がなかったの？」

蝶の発想に少し笑ってしまった。

「いや、あつたよ。けど俺、この通り不良だからさ。ガキン時からぐれてたんだ。友達も居なかったし、行事にも参加なんてしなかった」

聞いた蝶は驚いた顔をしている。

それに俺は少なからず胸が痛んだが、蝶の反応は当たり前のことといえた。

「意外」

その言葉に俺は首を傾げる。

すると蝶は、俺に眼を真っ直ぐ向けて話し出す。

「初めて不良って聞いた時も私には意外だった。

確かに行事に積極的に取り組んでる姿も想像できないけど、そんな風にぐれてる姿もあまり想像できない」

あんまり真っ直ぐと見てくるから眩しくて目を細めてしまう。

「空にとって今日が初めての経験なら、きっと誰よりも今日を楽しめる」

驚いた。驚かされた。

俺のための優しい言葉を、あの日、蝶のもう一つの顔を知ったあの夜に見た綺麗な微笑みで言うから、驚いてしまった。

「そうなるよ、いいな」

本当に、願ってしまう程に。

番外でhappy バースデー（前書き）

その名の通りバースデーネタ。
時間は少し戻ります。

番外でhappy パーティー

これは月初めの十月二日の話。

「おや、坊ちゃん御出掛けですか」

「田中さんか。ああ、行ってくる」

すっかり日が落ちるのが早くなったこの頃。いつもの様に学校から帰って着替え、出掛けようとしていた。

「そうですか。今日は旦那様や綾美お嬢さんも御出掛けのようで…

…蝶子お嬢さんも後に出掛けられるそうです」

こんな状況はあまり珍しい事ではない。

「それで蝶子お嬢さんからの伝言ですが、夕食はどうなされますか」

「外で食べるつもりだけど、蝶の料理か。……惜しいけど、悪いって言っといてくれ」

行き付けのファミレスには奥に団体客用の個室がある。

入ると十人の男がいた。奥にはヒ口達が陣取っている。

「おー、来た来た。ハル早く座れ。お前今日誕生日だろお」

「お願いします、ハルさん。些細なことでもいいんで教えて下さい」

「だあかゝらゝ、暗かったしこつちも必死だったんだから知らねえって言っただろ」

俺はミートスパを食べながらさつきからしつこい右隣の男に応える。

「亮、お前いい加減にしろよ。ハルさんもそのうち怒るぞ。すみま

せん、ハルさん。ほら、コイツ変なところでミーハーっすから。アゲハに憧れてんですよ」

やはり『紫蝶』が動いたとあっては周りが黙っている筈がなく、一ヶ月程前の、初めてアゲハに出会ったきっかけとなる喧嘩は瞬く間に知れ渡った。

その文句は、

「あの紫蝶が『雨旒』の一端を『虹』と共に潰したぞ」というもの。お陰で最近虹に近付く者はめっきり減ったが喜んでいいのか分からない。

その情報にメンバーは色めき立った。

特に隣に座る亮は前々から紫蝶を崇めていた節があり、俺の通り名である「紫」を一番気に入っているのもコイツだ。噂が流れだしだからというもののアゲハのことを聞こうと度々俺に詰め寄った。

「亮、俺に同じことを何度も言わずな。そんなにアゲハが気になるなら紫蝶に移ればいい。止めないぞ」

「そんなんっ。す、すみません。もう訊きませんから」
亮はすっかり落ち込んでしまった。

「おら、そのの三人組。お前ら寮だろ。そろそろヤバくないのか」
忘れがちになるが、ヒ口達は寮に住んでいる。

「あゝ、ほんとだ。」

武ちゃんに抜け道確保してもらってるから大丈夫っちゃんあ大丈夫なんだけど……」

「担任に頼るな」

教師が一枚噛んでるのも問題だが今更だった。武山という教師はいつもギリギリのところまで踏み止まる型破りな人だ。

「んじゃあ、俺も帰るわ」

「えーっ、ハルさんも帰っちゃうんすか？」

立ち上がった四人を見て周りが騒ぐ。

「良いよな、ハルは。家に帰っても可愛い女の子が、いグッ、」

「じゃあ、俺達はあるわ。お前らもあんまり騒ぎを起こすなよ」
ハルにカウンターを入れられ、ぐったりしたヒ口を背後にそう言われれば、他は頷くしかなかった。

「おかえりですか、若旦那」

玄関先で提灯ちようちんを持った安さんが出迎えてくれた。

「若旦那、もし良ければ台所に立ち寄ってくれませんか。行きゃあ分かると思いますんで」

「台所？ ……まあ、イイけど」

急な申し出であったが、喉が渴いていたので丁度いい。

暗がりの中、台所の電気をつければ成程、安さんが言いたかっただろうことがすぐに解った。

灯りの下で輝くのは一切れのショートケーキ。この家の中でこんなことを為てくれそうな人は一人しか心当たりがない。

どうすればいいのか分からなくて、とりあえずケーキを持って部屋へと急いだ。

「おかえりなさい」

その声に飛び上がりそうになった。

「蝶……」

どうやら足音で解ったらしい。廊下は蝶の部屋の明かりで照らされる。

「もしかして、このケーキは」

こくん、と頷く蝶を見て確信した。やはり、これは蝶が用意してくれたものだった。

「どうして、誕生日を……」

「今日、家中の人が空におめでとうって言ってたから。」

甘いものは平気？」

俺は思わずうつ向いてしまう。

「ごういうの、実はあんまり経験したことないんだ」

蝶は黙って聞いてくれる。

「ほら、此処つて男世帯だろ。親も忙しいし、本当に幼い頃やってただけ。元々ガラじゃあないし、それに対しての不満なんて考えたこともない。皆、律儀に毎年祝いの言葉をくれるしな。

……でも、改めてケーキを貰えるとやっぱり嬉しい。本当に久しぶりなんだ。

「ありがとう」

出来れば伝わりますように。ありつただけの感謝を込めた。

「喜んでもらえたなら作った甲斐があった。辰さん達も美味しいって言つてたから味は大丈夫だと思うけど」

「え、ちよつと待て。これ、手作り？」

頷く蝶。普段、蝶の料理は大抵和食だったが、まさか洋菓子も作れるとは。ちなみに、彼女の得意料理は人参にんじんを使ったものだ。

「それと、これ。」

前に貴方の目覚まし時計を壊してしまつたから」

綺麗に飾られた箱を渡された。以前、例に漏れず寝惚けて俺の布団に潜り込んでいた蝶は、俺の目覚まし時計を投げて破壊した。

あの時はいろんな意味で大変だった。寝てる蝶は手癖が悪い。

それからは携帯のアラームで起きていた。

箱を開けてみると、オレンジ色のにんじんがモチーフになっている目覚まし時計が入っていた。前のに比べると随分かわいらしい。

「ありがとう、蝶。使わせて貰うよ」

その後、この時計だけは壊されないように、枕元に置くのは止めた。机の上で大切に保管している。

じゅういち 諦めは心の養生（前書き）

みなさんお久しぶりです！

永らく放置してしまいました。

が、文化祭の続きです。番外編の前の話の続きとなりますので、お気を付けを。

じゅうちち 諦めは心の養生

「……羽杉？」

立ち止まって蝶の視線を追うと、茶色の軍服を纏いライフルを担いだ羽杉がいた。

左腕には橙色の腕章を付けている。

「確かに羽杉だな。腕章を付けてるってことは、あいつ風紀委員に選ばれたんだ。毎回、行事毎に生徒会の任意によって決まるから蝶に説明していると此方に気付いた羽杉が駆け寄ってきた。」

「おい、其処のアホ面。あの馬鹿共見なかったかッ」
肩で息をして、すごい剣幕で責められる。

「ていうか誰のことだよ。」

「羽杉、誰を探してるの？」

後ろにいた蝶が聞いてくれた。

そいつはやっと蝶の存在に気付いたのか、しばらく呆然とした後カア、と顔を赤らめる。それに気付かない蝶は不思議そうにしていた。

まあ、羽杉の気持ちはわかる。わかるが、やっぱりなんか腹立つな。

「や、柳原……、えと、その、に、似合って」

「あつ、アゲハちゃんはっけ〜ん」

羽杉の言葉は見事に遮られた。

手を握りしめて震える羽杉を同情すると同時にどこか安堵しながら、声の方に目を向ける。

そこには四人の動物達。正確には、着ぐるみを着た生徒会メンバーが。

「アゲハ、カワイイ〜」

黄色い猫の格好をした早瀬花厘がテンション高く蝶に抱きつく。着ぐるみといっても、そこらの遊園地にいるような顔も見えない

ごついものではなく、寝間着のような布製のフード付き服だった。「このバカどもっ、ちよつと目を離れた途端いなくなりやがって。何処にいたんだ。俺にこんな格好させてっ」

今にも掴み掛りそうな勢いで羽杉は他の三人に詰め寄る。

「だって、花厘がテーマは森の仲間たちだっていうから」

きよとん、としながら会長が答えた。何故羽杉が怒っているのかわかっていないようだ。そんな会長はピンクのうさぎの格好をしている。

「それとコレとなんの関係が、」

「まあまあ、落ち着いて。かなた君も文化祭の間は生徒会の一員なんだから」

「そうだぞお、羽杉。わがまま言うなや」

困ったように笑う霞呀は茶色のリスの格好で背中に木刀の包みを背負っていた。その隣に立つ、サングラスを付けた青いクマの早瀬葉狩はたこ焼きを片手にニヤニヤ笑っている。

「これでも苦肉の策なんだ。だって君、着ぐるみなんて絶対着てくれないだろ。だから獵師にして、風紀としての威厳もあって一石二鳥。」

それともこつちが良かった？

そう言った会長が何処からともなく出したのはグレーの着ぐるみ。それを見て羽杉は顔を引きつらせる。

「言っとくけど、こんなけ衣裳用意すんの大変だったんだからな。」

その滝川もやってんだお前も頑張れよ」

早瀬葉狩の言葉に羽杉が振り向く。俺の頭を見て目を見開いき一言。

「お前、何やってるんだ」

本当に、何やってんでしょうね。

じゅうに 朝に夕へを謀らず（前書き）

朝は朝のことで精一杯。とても夕方のことなど考えるゆとりがない。

じゅうに 朝に夕べを謀らず

きゃーきゃーと周りがうるさい。何でもいいのかコイツらは。この着ぐるみ集団を見て嬉しそうに騒ぐ奴らが信じられない。

「花厘、見てみる。あそこにつさぎのわたあめ有るぞ」

「はー君さっすが」

はしゃぎまくる早瀬姉弟。正直このテンションにちょっと疲れてきた。何より視線が集まるのが嫌だ。

「花厘、買ってきてあげるからみんなバラ園に行っておいて」

会長の言葉に早瀬は元気よく頷いた。

バラ園の周りには誰もいなかった。中庭の端にある此処は、普段立ち入り禁止となつているため当然かもしれない。遠くでうちのクラスが頑張っているのが見える。

「ここだったら周りの目を気にすることないもんね」

早瀬の呟きに驚いた。ああ見えて会長達もちゃんと考えているようだ。といつても、実際は蝶の為だけであつて俺はついでのようなものなんだろうけど。

「ぶくくく、空遥君ナニソレ、頭の、犬耳」

いきなりの笑い声に振り返ると透さんが体をくの字にさせて盛大に笑っていた。

「あー、面白い。姉さん達に見せないと。ねえねえ、悪いけど写真撮らせてよ。滝川先輩に見せたら何ていうか楽しみだ」

「遥さんっ。何でここに」

「あつ、蝶子ちゃん。とつてもかわいいね、それ」

無視ですかっ。

いきなり理事長なる人が来て、俺の名前を呼んで親しげになんか

したら事情を知る蝶以外が混乱するだろ。

「おい、お前何やってる。早く理事長を止める。柳原に迷惑が」

「さっきのは忘れるっ。頼む、忘れてくれッ」

混乱した俺は、話しかけてきた羽杉の襟元に反射的に掴みかかった。

「はぁ？何訳のわからないこと言ってる。ていつか放せ。」

言っとくけど、俺は事情を知ってるからな」

驚いた俺は手を放した。ドサツと音がしたが気にしないことにする。

「ッ、お、前、本当に腹の立つ奴だなっ」

「何で知ってるんだ。遙さんが俺の叔父だったこと」

苛立たしげに舌打ちした羽杉は、いかにも面倒くさそうに立ち上がる。

「どうでもいいだろそんなこと。例え俺が知っていたとしても、別にどうこうなるわけじゃない。ましてや今お前の所には柳原が居る。あいつらだって、疑問に思ったとしても何も訊かない。みんな自分の立場くらい知ってる」

確かにそうかもしれない。現に今、みんな何もなかったように理事長と写真で遊んでいた。疑問に思わなかったはずはないのに。

「おい、松永、いつまで遊んでるつもり？そのガキ共も早く茶あくらい用意しな」

いきなりの横暴な声に振り向くと、そこには二人の女性がいた。

くわえ煙草のピンクのメッシュのサングラスの女の人と、その隣には穏やかに微笑む髪の長い女性がいる。

「母さん」

驚く俺の耳に、誰かの呟く声が聴こえた。

じゅっさん 仏の顔も三度

えーと、とりあえず状況を整理しようか。

なんやかんやとバカ理事長と騒いでいたら女の人が二人来て、でその一人がめっっちゃ偉そうで、誰かが母さんと呼んだと。よし、こんなもんかな。

んで、どうなったかというと。

「母さん、何でこんな所に居るの？ 見て見て、この着ぐるみかわいいでしょ〜」

サングラスの女に近付き、次々と別の話をする早瀬姉とそれをニヤニヤと見る早瀬弟とサングラスの人。二人ともサングラスなのではたから見るとかなりシユールだ。さっきの台詞からするとあの三人は親子のようだ。成程早瀬弟とそっくりじゃないか。

となるともう一人の女性はと見ると、会長がにこやかに話し掛けていた。

「空気が暁美と似てる」

隣の蝶の言葉に頷く。確かに彼女は九瑠野をそのまま大きくしたような容姿と雰囲気を漂わせていた。間違いなく親子だろう。

げっと唸る羽杉を見てちよっと笑う。

「お前、九瑠野のこと苦手だろ」

「あの兄妹が苦手だ」

羽杉は即答した。

「貴女が蝶子ちゃんね」

子供達から抜けて、二人が近付いてきた。

「んで、そのガキ共が滝川と羽杉んとこの子か」

「本当に彼女にソックリねえ」

じろじろと観られてあんまりいい気分ではないがどうしようもない。

ふと、気付いた。蝶がうつ向いている。

「蝶？」

普段、こちらがドキリとするほど真っ直ぐ前を見つめているのを知っているため心配になる。

「……蝶？ うオッ」

再度の呼び掛けに蝶はバツと顔を上げた。あまりにも勢いがよかつたため危うくぶつかるころだった。

「私は、母さんではありません。」

クラスの仕事があるので失礼します」

ペコツとお辞儀をし、俺の手から看板を奪った。

はっと気付いたときには後ろ姿で、中庭を横断しようとして走っている。それを見た俺もすぐに走って後を追った。

「傷つけてしまったかな」

松永透が哀しそうに二人の後ろ姿を見つめていた。

「僕達は彼女にどうしても翔子先輩の陰を視てしまうからね。でもあんなに気にしているなんて」

「最近のいろいろな事が重なったんだ」

羽杉が透を睨みつける。透は苦笑するしかない。

「意外だね。君も後を追うと思っていただけだ」

透には応えず、羽杉はこちらを傍観している女性二人と心配そうにしている生徒会メンバーを順に見てそつと溜め息を吐いた。

「俺は物心ついたときからあの家族を見ているから柳原が何れ程母親似かは知ってる。でも違うことも知っている。うちの彼奴らに至っては話は聞いていても実際の翔子さんに会ったこともない。皆あいつについていつているんだ。柳原を信じている。」

そんなことより今は、何故それほどまでにあいつに構うのかが知

りたい。昔を懐かしむのなら本人に会いに行けばいいだろ。何故会社
の頭とも云えるその二人まで出てきたんだ」

多分ここにいる大人達以外の全員の疑問であろうことを問い詰め
ても透は眼を細めて微笑むばかり。それは何処か哀しむような^{いたわ}労る
ような遠い瞳だった。

じゅうし 思い立ったら吉日

よくあんな重い物を持って走れるな。ああでも、あんなに木製の看板を掴んだりしてトゲが手に刺さったりしないか心配だ。

なんて、少しズレたことを考えながらも蝶を追う。

「あれー？ オーイ、ハル。柳原さんと追いかけてここか？ 確かに男は追いたくなる生き物だからな。しかしほどほどにしとかないと」

「うっさい。黙れヒロ」

叫んだせいで無駄な体力消耗した。あいつ、後でシメル。

「うわーん。ハルに黙れって言われた」

「いつものことじゃん。死ねって言われなかっただけマシだね」

「ゆずちゃん。フオローになってないよ、それ」

中庭から入った廊下には丁度良いことに誰も居なかった。やっと近付いた蝶に精一杯手を伸ばし、細い肩を掴む。

「お願いだから止まってくれ。蝶っ」

ハアハアと二人の荒い息遣いが廊下に響く。思いの外焦っていたようだ。情けない声を出してしまった。そっと立ち止まった蝶を窺い見るが、蝶は前を向いたまま動かない。

「蝶、とりあえずその看板重くないか？ そこに置くか、俺に渡すか、どちらかにした方が良いと思うぞ」

俺は一番気になっていたことを言ってみた。すると蝶はピクリと反応し、横を向いて壁に看板を立掛ける。その際も顔は伏せられたままだ。

その様子をただ俺は見守っていた。

元々、走る蝶を気がつけば反射的に追っていた。捕まえてどうするかなど、これっぽっちも考えていない。ただ蝶を独りにするのが嫌だったから、もっと云うなら俺が独りにしたくなかったから、追

つて来たただけだ。自分から蝶に何かを訊くことなどまず無い。それは俺が蝶に少なからず負い目を感じている部分があるからでもあり、元来の性格でもある。だから俺は見守ることにした。それが今、俺が蝶の邪魔をすることなく行える唯一のことだと思えたからだ。

「知ってると思うけど、私どっちかというと母親似なの。瞳の色以外は」

振り向いた蝶の透けるような黒い眸が太陽の光で輝く。

空遙が眩しそうに眼を細めた。

「幼い頃から似てるなんて言われ慣れてる。私自身それを嬉しく思うのに。」

……なのに、同時に私はそれを酷く悔しく思ってる。皆私を通して母の姿を見ていることが。母の栄光の影から脱け出せない自分が、情けない」

揺れる黒い眸が溢れ落ちそうだった。

「……俺は蝶しか知らない。どんなに蝶の母親が凄くて、どんなに蝶に似てても、俺は蝶しか知らないんだ」

触れることも近付くこともまだ出来ないけど、言葉だけは届くように願う。

「俺に声を掛けてくれて、俺が強いと思う女の子は蝶だけだ。俺は蝶の姿に蝶しか見てない。ここ何カ月かの蝶しか知らない。だけど、俺にはそれで充分だよ」

馬鹿みたいに繰り返した、慰めにもならない自分の気持ちだけを伝えた言葉だったけれど、それで蝶が淡く微笑んでくれたから、それだけで満足だった。

じゆんしん 一意専心（前書き）

ただ一つのことには心を集中しましょう。

じゆうじ 一意専心

中庭に入ろうとしていた足が止まる。

「何だコレ」

中庭は人で溢れかえっていた。

「蝶子ちゃんお帰りなさい」

九瑠野がこちらに気がつき駆けてくる。

「……すごい人ね」

蝶の言葉に九瑠野は一瞬不思議そうに後ろを振り返り、すぐに納得したように頷いた。

「そっかあ、二人とも初めてだもんね」

「これじゃあ宣伝なんて必要なかっただろ」

空遥の疲れた声にも九瑠野はあっさり答える。

「うん、要らないよ。私達これでもA組でしょ。注目度は高いもの。

あれ、そういえば二人で何していたの？ 回っていても注目され

て大変だったでしょう」

その言葉に俺は開いた口が塞がらなかった。

目まぐるしく人が動く。

「ハル、邪魔なんだけど」

三和が呆れたように言ってくるが関係ない。

「うわあ、まだ怒ってるのかよ。ハル。」

あのなあ、いい加減許してやれよ。そりゃあ厄介ばらいしたのは悪かったと思ってるけどさ、ハルの為でもあったんだぞ。こつちとしても、そんな仏頂面したハルを接客させるわけにはいかないし」

ヒ口にまで諭されて、さすがに大人気なかったかとはつが悪くなる。

それにしても、いくら文化祭というものがこの学校の生徒にとつて大きな意味を持つているとしてもヒロがここまで真面目に取り組んでいる姿は少し意外だ。

「お前にしてはやけに張り切つてないか？」

聞くと、ヒロは困つたように少し笑つた。

「これでも旅館の跡取り息子だからね。接客業ともなると生半可にはできないように体に染み付いちゃつてんの」

ヒロは困つてんのか喜んでるのか曖昧な顔をする。

「んなわけで、ハルには裏方に回つてもらいまーす。周、ハルをお願いなあ」

無理矢理立たされてポンツと押された先は所謂厨房と呼ばれる場所。勿論外であるので簡易なものでしかないのだが、その忙しさは表と引けを取らない。

「え、ハル手伝つてくれるの？」

周が振り向いた。

「ちよつと待て。俺は料理は」

「大丈夫。ハルにも出来ること頼むから。」

じゃあ早速で悪いけど二階の調理室の四番の冷蔵庫から鶏肉の袋二つと、二番の冷蔵庫の隣にあるトマト一箱を持って来てくれるかな。あと、一番の冷蔵庫からは苺を三箱お願い」

「おい、ちよつと待」

「あつ、こらそこつ。海老を炒めすぎつ。その隣の人はもつと素早く掻き混ぜて」

呆然とする俺の肩にぼんつとヒロが手を置く。

「周も料理の事となると人が変わるから。料亭の息子の宿命？」

「早く行つた方が身のためだと思つよ」

ヒロと三和に諭され、そのあと馬車馬の如く働かされたのはいつまでもない。

じゅろく 善は急げ

「たたた、たた、助けてくださああい」

「……はい」

怯えた様子で必死に助けを叫ぶ三人の気迫に圧されて返事をしたものの、さて、どうしたものかな、と考える。

「あれ、ハル、何いじめてんの？」

「いじめてねえ」

まったくもって人聞きの悪い。今だに目の前でガタガタ震えている三人。文化祭二日目で相変わらず繁盛している中庭で、一応店の裏とはいえそんな大声をだされては困る。ほら、何事かと客が覗いてるじゃないか。

はあ、とため息をついたらさらに怯えられた。ネクタイを見たところどうやら同学年のようだ。女子が一人に男子が二人。三人共見てて可哀相なほどに足が震えてしまっている。

「俺のことも怖いくせに助けを求めらるってことはよっぽど困ってるんだろうけどさ。誰かに絡まれたとかそういうことなら俺なんかより生徒会や風紀に言った方がいいんじゃないか？」

「そ、それはそうなんですけど、わ、私達聞いちゃったんですっ
いや、そんなに睨まれても。」

「九瑠野会長の過激派FCが話してたんだっ」

「FC？」

さっきまで震えていたのは何だったのか。今度は焦れっただようにされる。

「FCっていうのはファンクラブのことですっ。会長のFCは今、少量の過激派とそれ以外に分裂しているんです。A組の方々と比べて微妙に手の届く位置にいる生徒会メンバーのFCはもともとA組のFCより行動的だったんですけど、特に会長はその人柄もあって生徒会の方々の中で一番FC会員数が多かったんです。でも知って

の通り会長には会計の早瀬さんという婚約者がおられて、FCの中には複雑な心境の人も少なくなかった。しかしそれはそれ、今までは暗黙の了解として多少大胆な行動にでる人がいても、それは少数であったのであまり気にかけていなかったんです」

「でも今学期になって異例の編入生が来た。それだけでも凄いのに、A組に入り、なおかつ生徒会とも親しい。……柳原さんのことがきっかけで過激派が暴走気味になったんだ」

蝶の名前が出てきたところで思わず眉を潜めてしまう。

「わっ。え、えっと勘違いしないでくれ。別に柳原さんを責めるつもりはこれっぽっちもないからなっ」

男の言葉に他の二人もブンブンと首を縦に振る。

「それで、それが今回のことと何の関係が？」

俺の質問に三人は顔を俯かせる。

「過激派は柳原さんをやつかんでいるんです」

そういえば、と俺は思い出す。初めて会長と直に会うきっかけとなったのは蝶が女生徒に絡まれていたからだ。今思えばあれは、その過激派と呼ばれる奴らだったのかもしれない。過激派と云っても所詮金持ち達のファンクラブ。総長をやっている蝶だから、きつともしもの時もなんてことないだろうが、アレは精神的にきつそうだ。女っていうのは男とはまた別の意味で怖い。

「それで聞いちゃったんです。彼女達が柳原さんの話をしているのを。それもE組なんて単語も言っていて……」

その言葉に俺はびっくりする。

「なんだって？ どういうことだ。なんでそこでE組なんて出てくるんだよっ」

「だから助けてって言ったじゃないですかア」

泣き出しそうな三人はこの際無視する。

成る程、確かにE組なんて出てきたら生徒会に知らせても無駄だ。というより、生徒会という肩書き自体が裏目にでる。

E組はその全学年が本校舎には存在しない。この広い敷地内で現

在の本校舎の位置的には裏側にあたるそこに、一つの別館がある。別館といつてもそれだけで一般の公立高校くらいの大さはあるが、そこに全てのE組がいる。ちなみにE組という枠組みは小学校や大学にはない。小学校五年生からクラス別けが決まるがそれはいわば猶予期間であり、その二年間のうちでやる気を表さなかった者、それでも金にものをいわせ学校を辞めようとしなかった者が中学からE組になる。もし大学に進むとしても学科が多彩になり、授業への参加も自主責任となるので大学では別ける必要性がなくなる。したがってあの別館には、中学から高校までのE組の生徒がいるわけだ。「あそこは無法地帯だろ。ていうか、向こうで好き勝手やるかわりにこつちには近付きもしないんじゃないのか?」

「そのはずですつ。そもそも向こうの人達にとつてもこの校舎に来る利点なんてないじゃないですか。でも私達、多分過激派と思われる人達が話しているのを聞いたんです。校舎の脇にある渡り廊下は今人通りが少ないから、そこに柳原さんを連れ出せば話していた人達と同じクラスの人がE組を連れてきてくれるって」

「いつの話だ?」

「今日の昼前」

「おいつ、ヒロつ、蝶は何処だ?」

「あゝ? 柳原さん? そういえば居ないなあ」

「三和つ」

叫ぶとすぐに三和が振り返る。

「柳原さん? そういえばお昼を買いに行つたきり帰って来ないよ。ほんの二十分前」

三和の言葉に悪い予感が頭を過ぎり血の気が引く。

「あんたらは此処に居る。脇の渡り廊下でいいんだよな?」

勢いよく立ち上がった俺に、三人は泣きそうな顔でこくこくと頷いた。

「だあいじょうぶだつて。ハルに任せておけば」

心配そうに空遥の走って行った方を見つめる三人にエプロン姿の周が声を掛ける。

「あゝあ、学校じゃなきゃ俺も行くのになあ。今ついていくって言ってもハル許してくれなさそうだし」

ヒロの言葉に周もウンウンと頷く。

「そういうルールだからね。そもそも学校じゃなかったらこういう展開はなかなか起こらないと思うなあ」

周の苦笑まじりの感想に三和もまったくだね、と微笑む。取り残された三人は目を輝かせてヒロ達のやり取りを見ていた。

じゅうしち 備えあれば憂いなし

これは、相手をしてもいいものなのか。

学年を確認しようとするれば赤いネクタイや青や緑のネクタイが目立った。といってもネクタイをしていない人もいるし、それに何故か青や緑のネクタイの人はその制服が紺色だ。

「……他校生？」

柳原の呟きに答える者は誰もいない。この場に居るのは自分と、今日の前にいる下卑^{げび}た笑みを浮かべた男達だけだ。

こうなる原因を自分は作った覚えはないのに。

考え事をしていたところに何を勘違いしたのか、一人の男が腕を掴んできた。

「アイツの言ってたことは本当だったんだな。わざわざこんなところに来たかいたがアッたぜ。見るよ、これはなかなかの女だ」

腕を持ち上げられ、間近で顔に舐めるような視線を送られる。それでも蝶は全く怯える様子も見せず、無表情にただ視線を相手に向けるだけ。いつそ張り切つて怯えさせようと頑張つていた男の方が哀れに見えるのは気のせいだろうか。そんな生暖かい視線を仲間が男に向ける中、蝶の思考は別のところにあつた。

実は先程から蝶は、こうなる心当たりが本当なのかと最近の自分の行いを振り返つていたわけだが、やはり見当もつかなかった。夜の時だつて喧嘩はあまり長引かせないようになっているし、そもそも個人情報が漏れるような失態は犯していないはず。

相手をするかどうか迷っているうちに、ついに仲間の視線に耐え切れなくなつた男が先に手を出した。柳原の胸倉を男が掴む。

「少し脅すように頼まれたんだが、やり方まで指定されたわけじゃねえ。それに俺達、こっちの奴らが言う“少し”の加減が残念ながらわからねえからな。恨むならこんな俺達にこんなことを頼んだア

イツを恨め」

「どうやら相手はやる気満々のようだ。」

「……実は私も、こういう場合の対処法は一つしか知らなくて。考えてみたけれど無理だったみたい」

どこか憂いを帯びたため息とともに胸倉を掴んでいた腕を握られ、男の心臓は本人の意志とは関係無しに、否応なく跳ね上がり浮足立つ。しかしそんな甘酸っぱくむず痒い痛みは一瞬のこと。

次の瞬間には腹と背中と左腕の激しい痛みと共に、男は倒れていた。

「今までこういう場面において逃げたことがなかったから、タイミングがよく分からなくて。やっぱり経験がないというのはダメね」
「そもそも捕まえられている時点でどうしようかと考えていること自体、逃げるという選択をするには遅いのだということに気付くべきなのだが、今彼女にそれを進言できる者はいない。」

突然のことに呆気にとられていた男達も動き出す。

一触即発の空気の中、不釣り合いな間延びした声が唐突にそれを破る。

「あれ？ おゝい、柳原。奇遇だなあ」

「武山先生、休憩中ですか」

おう、と返事した武山は実に美味しそうに煙草を吸っている。

「やけに派手な文化祭でびっくりしただろう。どうだ？ 楽しんでるか？」

まるでそこだけ別の空間のように穏やかに話している二人に男達は戸惑う。さっきまでの空気が嘘のようだ。

「なにしてやがる。教師だろうと関係ねえ。そのオッサンごとヤツちまえッ」

蝶に無惨にも倒されていた男はなんとか身を起こし、何やら隠しきれない私情を混ぜながら叫んだ。その声に周りの男達も一気に反応する。

一人の男が武山の後頭部を狙った。

「まったく仕方ないよなあ。行事となるとすぐガキどもは大なり小なりテンション高くなるんだから」

パシッと男の拳を後ろ向きの状態のまま受け止めた武山は驚く男にニヤツと笑い、その男の腹に肘を埋め込んだ。男は呻き声をあげて座り込む。

「ところでさあ、柳原。せーとうぼーえーってどこまでがそう言えると思う?」

武山の質問にも柳原は真剣に考える。

「そうですね。」

私の父の持論では、そもそも防衛に正当も不当もないそうです」

蝶の言葉に武山もふむ、と頷く。

「確かに」

蝶に近付こうとした男の襟を掴み、後ろに放り投げた。

「だけど今の俺は教師だからなあ。あんまりケガさせるわけにもいかないし」

ふう、と煙を吐き出す。

「忘れてるんじゃないやねえだろうな。俺達一人一人の家だつてこつちの奴らに見劣りしないほどの権力を持っているんだぞ。一介の教師なんてすぐに世間から消してやるッ。」

ガッ、ア

殴り掛かった男の手を武山が掴み、地面に叩き付けた。

「悪いが、そつちの心配は要らないな。いくらお前達の家が束になるうと、流石にこの“学校”、つまり松永に、この学校に関することについて歯向かえるはずがないだろ。破滅したいのか?」

にっこり笑って告げられたそれがただのはったりには聞こえなくて、男達は怯む。しかしここまでできて退くことはできない。

言わなければいい。言わせなければいい。今までしてきたように目の前の奴らを二度と刃向かわせないように、潰す。

学校が自分達の敵になることは無い。それどころか、ある程度ま

での自由を許してくれる。こっちの校舎まで来たことは多少の問題があるかもしれないが、そんな深刻になるほどでもない。最低限別館でのルールさえ犯さなければ、自分達の身の置き場は有る。

まずは、あの女。

「女を狙えつ。女だっ」

武山をかい潜った男が柳原に手を伸ばす。しかしそれを蝶は意外なもので遮った。

バイイン。

音が辺りに響く。

「あゝ、うちのクラスって喫茶店だったもんな」

「はい」

男の左耳を強打したのは、蝶が持っていた銀色の丸いトレーだ。

「すみませんけど、そろそろ戻らないといけませんので。売られた喧嘩なんて買いはしますけど、私である心当たりはないし時間もなし。」

申し訳ないですけど先生、手伝って下さい」

時間が気になりだした蝶の、頼みというには些か強引過ぎる拒否を認めさせない台詞に、それでも武山は気前よく笑って応える。

「自分のクラスの生徒に頼られちゃあ断れないな。元々見逃すつもりもなかったし、柳原と組むなんて面白そうだ。お手柔らかにかつ迅速に。面倒なことになる前に終わらせようか」

悪戯を思い付いた子供のように笑う武山を見て蝶は確信をもった。彼は何処か自分の父に似ている。性格というよりはその人独特の性質や雰囲気、父に似ているのだ。

蝶は気づかぬうちに呆れたような、喜ぶような、何とも謂えない笑みを浮かべた。

じゅっはち 弱肉強食

おいおいおいおい。

これは俺が悪いのか？ さつさと来なかった俺が悪かったのか？ いやいや、仕方ないだろそれは。だってあいつら怯えて全然話が進まなかったし、FCの事情なんて知るわけない。そら、ここまで来るのに多少時間はかかったが、それはこの学校が無駄に広いせいだ。

「……………」

とにかく今のこの状況をなんとかしなければ。

とりあえずは、あそこで暴れ回ってる馬鹿教師。

「おいっ、そのバカ山ッ。ッッ、武山ッ。」

あゝ、もうっ、お前らウルサイン、だよっ」

そこら辺にいた奴を適当に殴る。

「声が届かねえだろ」

まったく。こっちは昨日から馬車馬の如く働かされてるんだ。その分ストレスも溜まっていてるっていうのに。

…………… いっそのこと今、発散してしまおうか。

「空？」

物騒なことをわりと本気で考えていると、耳によく通る声が聞こえた。

「蝶。よかった。無事みたいだな」

「店の方はどう？」

「トレーで闘うアリスって。…………… かなりシユールな光景だ。」

「って、蝶っ。スカートでハイキックは、」

焦る俺に蝶はきよんとする。

いやいや、滅多にないその顔はかなりレアですけども。可愛いけどもっ。

「よっ、滝川。結構似合ってるぞ、それ。ちゃんとクラスに馴染めているようで先生嬉しいぞ」

「あっそ」

教師が思いつ切り生徒と喧嘩しやがって。人通りがないといって、騒ぎにならないのが不思議なくらいだ。

「なあ柳原あ、俺の気のせいか？」

「私も思ってたんですけど、増えてますね」

「だよなあ、と武山が苦笑いする。」

どうしてこう、こういう奴らの行動パターンはだいたい限られているんだろっ。

逃げ足の速い奴が仲間を呼ぶ。ありきたり過ぎる展開だ。

奴らも大分焦っただろう。なんせ一人の教師と一人の女子生徒がこれだけの人数を倒してしまったのだ。チラチラと目の端に映る敗者の山が痛々しい。

「中学生も混じってるし。……流石にヤバくないか」

首を傾げる蝶に説明してやる。

「うちの制服は小中高とデザインを似せてあるんだよ。高校が緑、中学は紺、小学生はグレーと、色は違うけどな。ネクタイの色のサイクルは同じ。つまり今年度の小中高の一年は皆赤だったこと」

そのときザワザワとまだ立っていた男達が騒ぎ出した。何事かと驚く。そのうち自然と人だかりが左右に割れた。

三人組。いや、この場合二人を連れた一人か。

茶色に明るく染められた髪に羽織っただけの深緑のブレザー。青いネクタイは取れない程度に軽く一結びにされているだけだ。

明らかにコイツだけ空気が違う。周りの奴らのコイツに対する反応もその一因だ。

「シマが騒がしいから何だと来てみれば。」

おい、説明しろ」

圧倒的な威圧。男達を振り向きこちらに背を向けているというのに、だ。

空遙は覚えのある感覚に眉をひそめる。

「へえ、なるほど。……これは、厄介なのが来ちゃったなあ」
皆が黙り込む中で気の抜けた武山の声だけがやけに響く。

「知っているのか？」

俺の質問に武山は言いにくそうな、すっきりしない表情のまま眉間にしわを寄せている。妙に長く感じた数秒間後、やっと武山は口を開いた。

「俺の予想が正しければ、アイツは今現在別館を仕切ってる奴だろ
うな」

「E組にトップなんていたのか」

教師や、家族にさえ黙認されている手におえない者達、それがE組だ。こいつらが厄介なのはただのやんちゃではた迷惑なだけのクソガキではないところ。バカに力を持たせるとろくなことにならないとはよく謂ったものだがこいつらのそれは最悪。有害であると云ってもいい。こいつらにとって最も有効で最も強力な力、それは権力だった。

そんな奴らが何百人といる別館。E組の頂点に立てる奴なんて本当にいるのか？

顔にでていたのだらう。武山が説明するように話し出す。

「集団があれば、例えそれがどんな集団だろうとリーダーやルールが自ずと出てくるもんだ。所謂いわゆる力関係だな。どんな動物だろうとそう
うだ。群れや縄張りだとか。

特に力に緻密な奴らほど露骨にそういうのが現れる。猿やライオンなんて想像しやすいだろ」

なるほど確かに。逆に云えば頭のいない組織なんて存在しない。そのことは自分自身が一番よく知っている。

ところで。

「……なんで国語の教師なんだ？ 生物の方が合っていないか？」
俺の言い分に武山は軽く肩をすくめてみせた。

じゅづく 縁は異なるもの、味なもの

「とりあえず收拾をつけないな」

「おい、と茶髪の男に呼び掛ける武山。

「て、おい。そんな気軽に話し掛けるのかよ。」

「ん？」

呼び掛けられて初めて俺達の存在に気付いたのか、男が振り返る。ドサツと男が掴み上げていた人間が落ちた。

「あー。あれ？ ああ、そうか。」

随分とお久しぶりじゃないですか。武山さん。これは奇遇、と言っているんですね」

不敵に微笑む男の意外な言葉に空遥が驚く。

「知り合いだっただのか？」

「まあ、プライベートでな」

あっけらかんと言ったのけた武山だが、それ以上は話すつもりはないらしい。

「それで、初代Noiseの貴方が何の用です？」

男の問いに武山は面倒臭そうに頭をかき、周りのE組の連中はザワザワと騒ぎだした。

「Noise？」

訳が分からず空遥は眉をひそめる。

「へへ。今はNoise（雑音）なんて呼ばれてるんだな」

「貴方がいなくなっただから、本来のものでは意味をなさなくなりましたからね。」

Noiseは代々E組のトップに立った者につけられる呼び名だが、本来これは“Noise”、つまりE組でない者が初めて異例的にE組を制覇したことから生まれた通称。Noise（雑音）の元。なかなか面白くて気に入ってます。

こいつらがこんなところで何をしているのか知らないが、そうだ

な、“後輩”のよしみでこいつらはオレが持つて帰りましょう」

「そりゃあ助かる」

ああ、そうそうと、こちらに背を向けていた男が顔だけで振り返った。

「潰された旗が掲げるその雨で、夜に舞うかわひらこを墮とそうとしているらしいね。迷惑を掛けた、お嬢さんへのお土産」

去っていく男の背中を空遥は苦虫を噛み潰したような顔をして見ていた。

「以上で報告は終わりです」

「お疲れ様」

松永透が^{ウツク}勞いの言葉を送ると三人は嬉しそうに微笑み一礼した。

「君達も此処の生徒だというのにわざわざ報告まで頼んでしまつて僕としては助かるけど、大変だつたら言つてね」

申し訳なさそうに苦笑する理事長に女生徒は笑つてみせる。

「ほとんど私達の趣味みたいなものですからお気になさらないで下さい。それだけ理事長に私達“FC相談室”が信頼してもらえていくように、逆に嬉しいんです。FCに關することにおいてある程度の権利まで与えてもらえて感謝しています」

「君達の実績は確かだからね」

それでもまだまだもじもじとしている少女に透は首を傾げる。

「あゝ、もうつ。山里、^{やまさと}お前が言わないなら俺が言つぞ。理事長隣にいた男子生徒がビシツと透に指を突き付けた。

「あなたの信頼を裏切るつもりはない。これは相談室とは全く別のものとして、決して私情を挟まないと誓つ。だから俺達も、ある人のFCを個人的に作りたい」

もう一人の男子生徒も言い募る。

「勿論相談室においての絶対的中立的立場は破りません」

「ただ私達のあくまで個人の趣味として、柳原蝶子さんのFCを作

らせてはもらえないでしょうか」

最後の女の子の言葉とともに三人は頭を同時に下げた。

「いいよ」

予想外のおっさりとした許しに、三人は驚きながらも顔を上げる。

「これは君達への信頼と感謝の印。決して相談室での活動では私情を挟まないことと、学校での柳原蝶子のみを対象にすることを約束してくれるのであれば、それを許そう。守れるよね」

微笑む透に三人は元氣よく返事した。

出ていく三人とすれ違うように一人の男が理事長室に入って来た。その姿を見て透はため息をつく。

「ここは禁煙ですよ。武山さん」

「お、悪いな」

武山は携帯灰皿で煙草を潰し、来客用のソファに深く座り込んだ。「んで、犯人は分かったのか？」

「さっきの子達が教えてくれましたよ」

武山はふくんといい、ソファにもたれ掛かった。

「あれが噂の相談室ねえ。FC専門の取締役とりしまりで、メンバーの人数もどついう奴らなのかも一切不明。それどころかただの噂だつていう意見まである。本当に居たんだな」

よいしょ、と武山はソファに寝転がった。

「そついえば、E組のトップに会つたなあ。雑音だつてさ。失礼な奴らだよなあ」

「おやおや、それは。若い頃を思い出しましたか？」

白々しく言ってくる武山に透も皮肉を入れて返す。それに武山は苦笑いを浮かべた。

「ホント、お前つて昔つから喰えない奴だつたよな。あれから随分経つが、俺の正体を誰にも言われずに見破つたのは結局お前だけだ。この仕事も、お前じゃなきゃ請けなかつただらうな。本来なら、き

「つと関わるべきじゃないんだ」

眼を手で覆い隠し、苦笑を浮かべる武山を透は自分の椅子に座り見守った。

「そう思っているのは、案外貴方だけかもしませんよ」

どのくらい経ったのか、透は静かに口を開いた。

「現に、あの人は自分の娘がこの学校に入ることに反対しなかった。むしろ、それを望んだ。

……昔から、そうだったじゃないですか。あの人は」

困ったように透は微笑んだ。武山は一瞬呆気にとられ、次の瞬間体をくの字に曲げて笑う。ひーひーと、一通りソファの上で笑い転げ、やっと治まった頃には透は呆れ返り、書類と睨み合ってしまった。

「あゝ、笑った。よく彼女みたいな思慮深い子があの子二人から生まれたな」

「隔世遺伝でしょうね」

透は素っ気なく答えた。

にじゅう 過ちては改むるに憚ること勿れ

「困ったことをしてくれたね」

ハアと、松永透は憂鬱そうに息を吐いた。

「それでも君は大切な此処の生徒だったからね。最善の策はとらせてもらおうよ。それが僕の義務でもあるから」

「生徒、“だった”？」

「そうだね。生徒“だった”」

夕陽を眺めていた透に、下から下校する生徒達が行儀よくお辞儀する。それに透は優しく微笑み手を振った。

「……退学処分ということですか」

掛けられた声に透はカーテンをそつと閉め、振り返る。

「僕の知り合いに頼んでおいたよ。そこに新しい学園のパンフレットがある。此処には及ばずとも名誉ある学園だ。君にはその方が合ってるよ」

俯いていた少年は膝に置いてあった手をギュウツと握る。

「……何故ですか。僕はついこの間までA組に属していました。アイツが、アイツさえ来なければっ」

「だから今回のことを？ 君は、E組と九瑠野夕夜のFCを利用して柳原蝶子を襲ったね」

松永の確信を含んだ問いに少年は反論しようとして口を開けるが、それは松永が示した手によって止められる。

「今更自分じゃないなんて言い訳は通じないよ。生徒に冤罪をかけるなんて、あつてはならないことだからね。こっちはそれ相應の根拠と覚悟を持って動いてるから」

「こんな中途半端な時期じゃ生徒会にも入れないッ」

ダンツと少年は両手の拳をテーブルに叩きつけた。それを松永は憐れそうに見つめる。

生徒会役員が決められるのは進級時だと決められている。それ以

外のときに変動はない。例えどんなにその人物が無能だとしてもだ。逆にいえば、一度生徒会役員に選ばれると一年間はその役をどんな形であれまっとうしなければならぬということになる。

「今まで僕は家の誇りだった。それが、B組に落ちただけで、役員になれないだけでつ。」

兄さん達なんてA組にもなったことないじゃないか。それなのにどうしてつ、どうして僕だけがあんな目で見られなきゃならないんだ」

少年が落ち着くのを待つてから透は口を開いた。

「やはり君は別の学園に行った方がいい。A組だからといって全員にファンクラブがあるわけでないのは君も知っているだろう？ つまりはそういうこと。無理をした背伸びは、自分の才能を逆に潰すことになる」

静かな松永の声に、少年はただただ俯いていた。

「今回のことは仕方がなかった。なにせ君は知らなかったんだから。でも、世の中知らなかったからといって赦されないことも多い。それでも考えられる処分のなかで最も軽いものになんとかすることができた。本来なら、被害は君の家系自体にも及んでいただろうからね。それだけのことを君は無自覚にも犯してしまっただ」

「滝川が居たと聞きました」

少年の諦めを滲ませた声に松永はきよとんとする。

「空遙くん？ あゝ、違う違う」

怪訝そうに眉をひそめる少年に透は苦笑しながら続ける。

「あそこは子供のことに口を出さないことが家訓のようなものだから。そこは心配しないで大丈夫。」

ただね、此処はいわば宝石を保管する宝石箱だと僕は思っているわけだけど、宝石は自分自身でその価値を自覚しているわけではないうつんだ。発見した人がいて、需要者がいる。価値を決めるのは石自身でも見つけた人でもない。その需要者。つまり価値を決めるのは全て周りの第三者に依存するということ。僕はその宝石の原

石を護る管理者として此処に居る。今まで積み重ねてきた信頼と実力によってね」

少年は黙ってその話に耳を傾けていた。さっきまで、自分も確かにその中に居たのだと。

「その中で、最も重要にするべき宝石を君は傷つけようとしてしまった。例え本人や親が気にしていないとしても、周りもそうだとは限らない。特に“彼女”の場合、至る所から怒られそうで怖いよ」
困ったように笑う松永だったが、一方少年はそれどころではなかった。

ただ愕然と、やっと自分のしてしまった罪を理解する。そしてその対象が彼女であったことに驚きと困惑が隠せない。しかし確かに納得している自分もいる。

「……もう一度自分を見直したいと思います。ご迷惑をおかけしました」

深く頭を下げ、少年は去っていった。

にじゅういち 血は水よりも濃い

コンコンと控え目なノックが聞こえた。音楽を聴きながら雑誌を読んでいた葉狩が顔を上げる。

「はー君、ちよつといいかな？」

「花厘？」

声を掛けると花厘はひよつこりとドアから顔だけを覗かせる。葉狩は苦笑し、雑誌を手放した。

「アゲ八ちゃん、今日大丈夫だったかな。あの子達に言われてあそこ人に近付けないようにしたけど、本当にそれでよかったのかな、なんて思うよ。E組相手だとへたに手を出せないのは判ってるんだけどね」

ベッドの上の葉狩の隣で花厘は膝を抱えるようにして座っていた。「理事長の調印を出されちゃあな。それに今回はFCが関わっていらしいし、あれに関してだけは相談室が最高権力を持ってっから手紙で指示が来たときには流石に驚いたけど。顔だしNGの噂は本当だったんだな」

そのときのことを思い出したのか、にやにやと愉快そうに葉狩が笑う。

「はー君、愉しそうだね」

花厘は拗ねたように言い、隣の葉狩にのしかかった。

「ちょ、花厘、重い重い。悪かったって。落ち着け」

「はー君のバーカ」

クスクスと花厘は楽しそうに笑う。それを見て葉狩も安心したように軽く笑った。

「とにかく、アゲ八ちゃんには文化祭初日からお母さん達のせいで嫌な思いさせちゃったもん。明日のハロウィンは絶対楽しんでもらわなきゃ」

花厘は腕にぐつと力を入れて気合いを入れる。

文化祭二日間を無事終えた翌日は十月三十一日、つまりハロウィンであった。毎年十月の終わりに文化祭を行うこの学校は、三十一日には必ずハロウィンパーティーも行ってた。所謂後夜祭の代わりである。その日はみな様々な豪華な仮装をし、学内にある広いホールで食事を愉しむ者もいればダンスを踊る者もいる。部外者は一切立ち入り禁止。生徒の力を試す文化祭に対して、ハロウィンは学校側が生徒の為だけに行う娯楽行事であった。

「母さん、お前に怒られて流石にしょげてたもんな」

「当たり前だよ。きつと明日^{あすか}香さんだつて話を聞いた暁美ちゃんに怒られて反省してると思うし」

ここで九瑠野夕夜の名がでないところが彼の人となりを示している。

「……あの人が子供に怒られたくらいで反省するような人には思えないけどな」

「それでね、はーくんっ」

「んあ？」

花厘の大きな声に葉狩はビクリとする。

「明日のハロウィンパーティー、一緒に踊ろうよっ」

葉狩の顔が嫌そうに歪む。

「はあ？ 俺が？ るのがいるだろ」

「ゆや君ともちゃんと最後に踊るよ。だつてどうせはー君、ずっと隅で食事してるだけでしょ。ね？」

ズイと身を乗り出して懇願する花厘をなんとか諦めさせようと葉狩は頭を巡らす。

「花厘、あんな」

「中学校のときははー君、参加もしてくれなかった」

俯いた花厘の表情は見えない。

「暁美ちゃんも帰ってきてきつとみんな一緒になったのに。なのに、はー君は私とは踊りたくないんだね」

どうしてそこに繋がる、と葉狩はため息をつきたくなった。

「そら仕方ないと思うよ。あの頃ははー君、反抗期真っ只中だったから。ゆや君もそう言ってたし」

「反抗期って言うな」

面倒になつてきた葉狩がバフツとベッドに寝転がる。

「思春期の男の子はいろいろ大変らしいしね」

「……それものから？」

「ううん。これはお母さん」

ああ、そう、と葉狩は額に腕を乗せて目をつぶる。

「はー君、もしかして彼女とかいるの？」

それを聞いた葉狩は思わず苦笑してしまう。

「花厘、いくらなんでも突飛し過ぎ。誰かさんのおかげでそんなヒマねえよ」

目を開け意地悪く笑う葉狩に花厘はムツと頬を膨らます。その顔を見て、葉狩がますます笑う。

「しょうがないなあ。踊ってやるよ、仕方ないから。るのが泣いても知らないからな」

花厘の顔がぱあっと明るくなる。

「はー君、だあいスキッ」

ハイハイ、と花厘の体を受け止めて葉狩は明日の夕夜の反応を思い浮かべ苦笑した。

「花厘、もう俺寝るぞ」

「一緒に寝ていーい？」

にっこりご機嫌に笑う花厘に葉狩は軽くため息をつき花厘も寝れるようにとベッドの端に体を移す。

「もつおとなしく寝ろよ」

「はーい」

元気のいい返事を合図に葉狩は部屋の電気を消した。

にじゅういち 血は水よりも濃い（後書き）

どうやら私は双子に弱いみたいで

きょうだいもいいんですけど双子も好きです。それも全然似てない

双子とかね（双子の意味ない）

性格正反対とかもう、大好きっ

あと家族愛も好きです。特に擬似家族。

家族以上に家族っぽいとかね。もうたまりません。

そんな作者の好みが凝り固まった今回のお話でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0169f/>

空の蝶

2010年10月12日23時45分発行